オシリス神話群

まめ太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
オシリス神話群

【Ｎコード】
Ｎ１１０１Ｕ

【作者名】
まめ太

【あらすじ】
エジプトのオシリス神話群をまとめて１本のストーリーに仕立て直したものです。アメブロに展開していたものを、こちらへ移動。セトのイメージ随分違います。最重要項目『不貞は極刑』
オシリス神話群の魅力は、そのドロッドロの昼ドラストーリーです。

？　原初の水ヌン（前書き）

これのジャンルは「童話」であってるのか、もしかして原作名「エジプト神話」入れるべきなのか、悩ましいところです。２００３年度作品。

神話の不思議：セトは次男か三男か？　イシスと大ホルスがそれぞれ姉と兄であるので、本来４番目ですが、アバウトに次男でまかり通っているのが古代エジプトです。そもそも神話「群」とあるように、元はバラバラで纏まりがなく、エピソードも地域によって増えたり減ったりします。
大ホルスの存在も地域によっては居たり居なかったり、まことにアバウト。
設定の細かい部分はうっちゃりかまして、おおらかに読んでください。
原本がアバウト過ぎて苦労したのはいい思い出です。

？　原初の水ヌン

まず、世界には原初の水である「ヌン」がありました。
混沌としたその水の中に、いつしか、８匹の蛇が現われました。
蛇は水の中を泳ぎ回り、水の面にさざ波を起こし、波は幾重にも広がり、やがて、一輪の蓮となって浮かび上がってゆきました。

蓮の花が開きはじめると、中にあった、最初の光に目が眩んだ蛇たちは、またゆっくりと水の底へと沈んでゆき、そして眠りにつきました。
蓮の上の輝ける者は、我が身と女性の右の手で、二人の子供を産みました。
風の神シュウと、湿気の女神テフヌトが誕生しました。

二人の神はお互いでもって子供を作り、大地の神ゲブと大空の女神ヌートを誕生させました。
・・・これで世界が出来上がったのでした。
けれど、ゲブとヌートは仲の良い夫婦だったので、世界が出来上がっても、離れようとはしませんでした。
痺れを切らした父のシュウが、風の力で二人を引き剥がしてしまいました。
大地の神ゲブは悲しみに揺れ動き、妻ヌートの手足をしっかりと掴みました。
今でも時折、地面が揺れるのは、ゲブが妻の手足を掴んだ腕を握り直すからだと言います。

光り輝ける者の名を、ラーと言いました。
世界を産み出した始源の神は、世界が出来上がると地上へ降りてゆきました。

次々に、あらゆる神がラーの御手より作り出されました。
ラーの名を呼ぶ者があり、振り返るとそれは大空の女神ヌートなのでした。
「遥か天空より呼び掛ける子よ。
いったい何の相談か？」
「私のこの身の５人の子供を、いつ、産み落とせばよろしいでしょうか？」
ラーは即と答えました。
「天より大地に落ちるものは、我が太陽の光のみ。
理を乱せば災いとなろう、その子らを産み落とす日は３６０日の、どの日にもない。」

嘆いた女神の声を聞きつけたのは、智慧の神、狒々の姿を持つヘジュ・ウルでした。
「嘆くには早かろう、ラーが仰せの３６０日以外ならば問題はない。
ここは我が智慧を持って、この難問を解いてみせよう。」
ヘジュ・ウルは素早く月の元へ行き、巧く話して時間を盗み出そうと考えました。
月はラーを恐れ、なかなか返事を返しません。
「・・・では、こうしよう。
月には類が及ばぬように、私と賭けをするのだ。この駒盤で勝負をし、負ければお前の光を私に渡す。
ほんの少し、この皿にひとかけら。」
月は負け、智慧の神はまんまと光を手に入れました。
「もう一度勝負をしよう。私が負ければカケラを返す。勝った時には、ほんの少し、このカップを満たすくらい。」
こうして、少しずつ、少しずつ、月はその身を削ってゆくこととなりました。

月から奪った光は、ちょうど５人を産ませる５日分となりました。

智慧の神ヘジュ・ウルは、偽りの5日を作り、それぞれの日に5人の神をヌートに産ませたのでした。

最初に産まれ落ちたのは、優しい子オシリスでした。するりと母から抜けだしました。次はホルスの番でしたが、どういうわけか、女神の腰が破れ、セトが先に飛び出して来ました。
女神は痛みで呻きます。血が流れ落ち、空の一部を赤く染めてしまいました。
さっ、とラーの力で傷は癒え、遅れてホルスが産まれました。
ラーは全てを見通していたのです。ただ、溜息だけを残し、ラーの船は過ぎてゆきました。
翌日にはイシスが産まれ、次にはネフティスが産まれ、ようやくヌートは身軽になれたのでした。

？　破壊の神セクメト

ちょうど、かなとこの神プタハが、世界中の動物をろくろをひねって作り出しておりました。
いいかげん面倒になり、全ての動物の雌の腹にろくろを仕込んでしまった時でした。
人もケモノも勝手に増えてゆき、その様子を満足げに頷いて見ておりました。
けれど、もう一つ、草を食む動物を作ると、たちまち草を食い尽くすほどに増えるのです。
プタハは黙々と、肉を食らう獣を作り始めました。
カナトコの神が、世界のバランスを取るのに苦労している頃、ラーは人の国へ降り、最初の王となりました。
傍にはヌートの産んだ5人の子供がありました。
それぞれ、オシリスはイシスを、セトはネフティスを、妻に娶ったのでした。

大地に降り立ち、人として暮らすうちに、始源の神ラーといえども老いてゆきます。
人々の国が、勝手におき上がってくる頃には、ラーはすっかり老いぼれてしまいました。
耳は遠くなり、人々の声も届きません。目は霞み、街で起きていることも見えなくなりました。
そして、人々の祈りの声も途絶えてしまったのでした。
それぱかりではありません。
祈らぬ人々の願いはそれでも神々にもたらされ、叶わぬ願いが山と積もり、人々の不平がその上にさらに降り積もってゆきました。
人々はラーを悪し様に罵り、ラーに連なる神々をも嘲るようになったのです。

「我は大きな間違いを犯してしまった。人として、人と共に生きようと願ったことだ。
理を糺すには、この世界を破壊するしか手があるまい。
元に戻して始めから作り直すのだ。どうだろう、神々よ。」
この申し入れに、賛同する神と反対する神で意見はなかなか纏まりません。
優しい神オシリスはラーを説得しました。
「ここまで造った世界をまた一から作り直すなど、第一面倒ではありませんか。
ラーの力が衰えたわけでもなければ、その判断が誤まったわけでもありますまい。
どうか、お考え直し下さい。」
その意見には弟のセトも賛同して言いました。
「壊すことは容易いこと。しかし、また作るとなれば、そのための時間はさらに膨大なものとなりましょう。
偉大なる太祖にして創造主たる者よ、あなたの名を貶める者のみを屠ってしまえば済むことです。
罪のない者を道連れにするなど、真実、愚かなことではありませんか。」
多くの神がその言葉に賛同し、人々を見捨てる決定がなされたのでした。

ラーはさっそく自らの右目を刳りぬき、血のしたたるその目玉からは恐ろしい獅子の姿をした女神セクメトが誕生しました。
神々の祝福を失った人々は、この恐ろしい神の前にただ逃げ惑うばかりでした。
「逃げよ、人間たち。
我の前から全力で走れ。
それを捕え、喉を切り裂くことこそ、我が望み。」
セクメト女神の殺戮は凄まじいばかりで、情け容赦がありません。

瞬く間に、人という人は殺され尽くしてゆきました。
あまりにも凄惨なその様子には、神々すらをも身震いし、女神を産み出したラーまでもが、その恐ろしさに慄然としたのでした。
ラーは、なだめるように女神に言いました。
「我が娘、セクメトよ。もうそろそろ良いだろう。
死の遊びはこのくらいで止めにせよ。」
「いいえ、父上。私はまだまだ殺し足りない。
人を殺し尽くした後にも、きっと私は満足など出来ないでしょう。
私が常に心に掛けている事柄はただ一つです。
人を殺し尽くせば、次は何を狩ろうかと、それが何より心配なのです。」
女神の答えを知った神々は色を失い、父たるラーは鼻白み、そして女神を去らせたのでした。

智慧ある神のトートが、この問題を憂えてラーに問いました。
「全ての父たる太祖の神よ、このままでは人間のみならず、セクメト女神も不幸なままです。
死を与えることのみに心奪われ、恐怖のみを伴侶とするは、不幸の極み。
女神も、本来の釣り合うべき伴侶を持って、心穏やかなるがあるべき姿。
それも女神はあなたの娘、これを捨て置くことはあまりにも惨い。」
トートに言われるまでもなく、心痛めていたラーは、決意して神々に問いました。
「女神を止める手立てはないものか？」
しかし、あの恐ろしいセクメトを止めることが出来る神など居はしないのです。
ざわめきに揺れる神々の面を眺めやり、ラーは溜息と共に言いました。
「せめて眠らせてくれたならば、我が力を持って、女神に与えた力

をいま少し削ってやれるものを・・・。」
すると、智慧の神トートが前に出ます。
「では私にお任せを。」
続けてトートは腕を合わせ、困ったように、覗うようにラーに告げました。
「・・・しかし、人の力を借りねばなりません。
お怒りを解き、協力しようという敬虔な者にはラーの御加護を賜りますように。
さすれば、人々も多いに働き、それだけ作業もはかどり、神々の憂鬱も早くに解決するでしょう。」
一も二もなくラーは人々を許し、この時を持って他の神々の加護も人々の上に戻ったのでした。

セクメトは不満でした。
神々が、あからさまに狩りの邪魔をしだしたからです。
沼地では、水に妨げられ思うように進めません。砂漠では砂嵐に行く手を阻まれてしまいます。
街へ行けば、稲穂までもが女神の足に絡むのです。
「誰もかれもが、私の邪魔をする！
殺せと命じたのは、そも、私の父ではないか！」
イライラとくすぶる心を持て余していたところへ、とても良い芳香が漂ってきました。
匂いを辿って行き着いた先には、大きな壷になみなみと満たされた赤い液体が入っておりました。
人々が神々に捧げるビールとワインを一緒に足して、そこへイシスが強い魔法を掛けておいたのです。
酒の色はどこまでも黒く、どこまでも赤く、ギラギラと光る水面はまるで、血をぶちまけた地面のぬめりが反射しているかのようです。
女神はぺろりと唇を舐め、最初の壷を抱えこみました。
一息に飲み干すと、次の壷を抱えます。そうして、瞬く間に、そこ

にあった全ての壷は空になってしまいました。
「・・・もうないのか。
まあいい、少しは気が晴れた。どれ、狩りに出掛けるとしよう。」
ところが、足が言う事を聞きません。手も同じに女神の思うように
は動かないのでした。
「手足が痺れて、どうにもいけない。少し休憩するとしよう。」
魔法が掛けられ、とても強い酒となっていることなど露も知らない
女神が呟きます。
やがてセクメトは地面にごろりと寝転ぶと、手足を広げて寝入って
しまいました。
そうして、まさに眠っているうちに、ラーの力でその残忍な狩りの
喜びと、血を欲する気持ちとを抜き取られてしまったのでした。

こうして、人々はまた敬虔に神を敬い、神殿には供物が山と積み上
げられるようになったのですが、神々の父、ラーはまだ、不満でお
りました。
老いて、歩く事すらおっくうです。
天から降りることなく空を支えるヌートは未だ若々しく、なおさら
自身の判断が誤まりであったような気がしてなりません。
人とは、老いとは、こんなに面倒なものであったのか。
遂に、ラーは天の船に戻ってしまったのでした。
「知恵者トートよ、地上を頼む。ただし、お前は人の世に降りるで
ないぞ。
老いてボケた智慧の神など聞きたくもない。」
そこでトートは天と地の境目に留まり、世界の記録を始めたのでし
た。
その頃は、まだ地の下には国がなく、そのため、船は難儀をしてお
りました。
多くの怪物が、野放しで地の下に潜んでいるのです。
それと闘い、ラーを護るために神々は共に船に乗り、どうにか天の

河を運行しておりました。
ヌートの子供の大ホルスは梶を取り、その弟セトは舳先で敵を射掛けます。
そして、地上に残ったオシリスは、荒れた大地に住まう人々に農耕の技術を伝えておりました。人々はオシリスを称え、王として求める声が高まってゆきます。
いつしか、地上はラーのものからオシリスのものへと変わってゆきました。
ラーもこれを歓迎し、オシリスを次の王と定めたのです。

しかし、これを承服出来ない神が一人、居りました。
ラーと共に太陽の船に乗り込んでいたために、王になれなかった弟のセトです。
セトは不満をラーにぶつけました。
なにゆえ、兄が王位を継ぐのかと。
約束などなかったのです、ラーは困り、苦し紛れに言いました。
「一番先に産まれた者が、一番に遇されるのだ。
我を見よ、一番先に産まれただけで、太祖となっているではないか。」
ラーのこの一言が発せられた時から、王位や財産は一番上の子供へと受け継がれてゆく決まりが出来たのです。セトは無言で下がりました。
しかし、ラーの前から下がる時に、セトは問います。
「一番に遇される者が死んだ時にはどうなるのですか?」
ラーが答えます。
「その時には・・・次に産まれた者が遇されるのだ。」

？　オシリスの死

新しい秩序が定まり、新しい王が生まれた事を、世界中がお祭り騒ぎで祝っておりました。
セトが何かを企んでいる事を見抜いたラーは、すぐさまセトに告げたのです。
「先に生まれたる者は先に死す。
それは自然の慣わしではあるが、罪咎のなき者を死に至らしめ、その座を奪うは許されぬ事だ。
神と言えども定められた命の分を曲げる事など出来ぬものと知るがよい。」
セトは知略のある神でした。ラーの船を、恐ろしい敵から護っている神なのです。
闘いを知らぬ兄のオシリスとでは、勝負にもならないでしょう。
兄弟での闘いを、ラーは先もって禁じたのでした。
「死によって贖うべき罪を犯した時にはどうでしょうか？　私は兄でも許さない。」
「その時には思うままにせよ。」
そうして、この赤い神と呼ばれるセトは、ラーの言葉を承知したのでした。兄の死をじっと待つ事としたのです。

やがて新しい王オシリスは、広大な二つの国を、一つに纏めるほどの力を得ました。
豊かな大地に穀物が実るのも、オシリスとイシスがもたらした新しい農耕の知恵によったのです。
豊穣の神オシリスが君臨する地上の国は、豊かで恵まれた国となりました。
オシリスは大地の繁栄を、他の人間たちの国にまで広めてやりたいと願い、ある時、旅へと出掛けてゆきました。

新しい農耕と、豊かな実りをその土地と人々に約束するためです。
旅へ出てゆく前に、オシリスは弟セトに告げました。
「私に何か事があれば、我が妻イシスと妹ネフティスを頼む。」
そうして出掛けてゆきました。

何年か経ち、オシリスが二つ国に戻ってくる日がやってきました。
ナイルの川辺はどの村、町も、お祭り騒ぎで王オシリスの帰りを待ち侘びました。
オシリスが戻った日は、神々もまたお祭り騒ぎでお祝いをしたのです。
すっかり酔って寝床へと入ったオシリスは、そこに妻イシスの影を見つけて抱き寄せました。
しかし、それは姉イシスの衣装を着て待っていた妹のネフティスだったのです。
驚いたオシリスは妹を放しました。
「王となりし者、兄オシリスよ。二つ国の全てを手にしたる者よ。私とあなたの弟セトとは不仲です。子のない事をことさらに責めるのです。
けれど、それは我が罪でありましょうか？
我が望みをお聞き入れ下さい。夫セトに疑惑と嫉妬の心を植え付けたいのです。」
思いもよらぬ懐妊の知らせを聞けば、あの弟セトの事、要らぬ疑いやら疑念を募らせるでしょう。
それでも妻の子は自身の胤と、最後には大いに喜び、二人の間も巧くゆくに違いありません。
闇の女神ネフティスの計略を聞き、オシリスは二人を憐れに思い召し、ついには許されぬ夜をその妹と過ごしたのでした。

ネフティスが辞して褥を後にした時、片隅の暗闇が揺らめきました。
オシリスもネフティスも知らなかったのです。この場にもう一人、

別の兄弟が闇に紛れていたことを。
オシリスの寝息が静かに夜に溶ける頃、ようやく暗闇から姿を現わしたのは、ネフティスの夫セトでした。
その瞳は怒りに燃えたち、結ばれた口元は強い決意を持っておりました。
兄においては、出来るだけ早いうちに死んでくれよと、少々悪趣味な悪戯を仕掛けるつもりでおりました。
豪華な柩を贈りつけ、つと眉を顰める様を笑ってやろうと考えての事だったのです。
何より兄は誠実な神。まさか、このような仕打ちを受けようとは夢にも思わなかったのです。
意地の悪い余興は企みの種となったのです。
セトは兄オシリスの身体を、慎重に測ってゆきました。他の誰にも合わぬほどの正確さが必要となりました。
そうして、オシリスの祭りは数ヶ月の間、続きました。
セトは知らぬ顔で兄の帰りを歓迎していました。兄もまた、知らぬ顔で弟を欺き通したのです。
やがて、セトの妻ネフティスが子供をその身に宿しました。
それが不実の子であることを、妻ネフティスも隠しておりました。
そして、セトもまた、知らぬ顔で待ったのでした。

セトは、セトを信じる人々を集め、一つの柩を作らせました。その装飾は絢爛で、豪華です。
セトはこの柩を埋葬に使うつもりなどありませんでした。
「見よ、この見事な柩を。これに収まるべき者が、おのずと知れるほどの出来ではないか。
・・・もっとも、ここへ収まるその者は、大それた罪人でもあるのだが。」
憎々しげにそのような宣告をし、人々に命じて、また柩をどこかへ運び去らせてしまいました。

中天の太陽は、一部始終を見ておりましたが、何も告げることはありませんでした。
ただ・・・、溜息のような雲がひとすじ、空を横切ってゆきました。

ついにその日がやって来ました。
セトは自身の信者が多くいる街タニスにて、宴を催しました。
呼ばれた神は大勢にのぼり、一時に神が集まったこの街は、名だたる神が集う街、ヘリオポリス以上に輝く夜を迎えたのでした。
麦酒を片手に、セトが高らかに宣言します。宴の始まりです。
「今日は祝い事があるのだ、我が妻ネフティスに子が出来た。
妻には初めての子供、これを祝って一つばかり余興を考えておいた。」
言葉が終るよりも早く、見事な装飾の豪華な柩が神々の前に引出されました。
前以て、オシリスから罪深い夜の告白を受けていた妻イシスは、これが疑わしくてなりません。
自身ですら、その驚き、嘆き、憤りは恐ろしいほど強く、そして今も心に澱のように沈みこんでいるのです。
あの弟、激しい気性のセトがこれを知ったら、どうなるでしょう？
「我が夫オシリスよ、御用心を。セトは企みを持っているのでは？」
オシリスは笑って相手にしませんでした。
「何を疑っているのだ、セトは厳しいが間違いなど犯さない。
ラーを護り通してこれたのも、それゆえではないか。」
弟を信頼している夫オシリスは、容易に妻には賛同しないのでした。
夫や妹の身が密かに案じられ、イシスは固唾を飲んで見守りました。
目前のセトは上機嫌。
今も、何も知らずにいるのでしょうか？

「・・・この見事な柩を、これにぴたりと収まる者に、進呈しよう。
我が妻と、産まれてくる子のために、私からの贈り物としたい。」

美しい柩はたちまち黒だかりの群れで見えなくなりました。
ラピスラズリの青い石やヒスイの緑、ルビーなどの飾り石がキラキラと輝き、神々からの溜息が賞賛となって投げ掛けられます。
神々が一人ずつ、これに横たわってみるのですが、どうにもピタリとは合わないのです。
少しくらいのズレならば、とセトに言う者があっても、セトはうんとは言いません。
やがて、企みの神は玉座に座る兄オシリスの方を見据えて言いました。
「我が兄オシリスよ、この余興はお気に召さぬか？
もう、残る神は貴方とラーの他には居なくなってしまったのだが。」
オシリスは答えるように、手にしたワインをそこへ置き、セトの元へと歩み出ました。
「私もラーも合わねば、どうするつもりでいたのだ、弟セトよ？」
「その時には空のまま捨ててしまいましょう。」
右足を置き、左手を沈め、全ての身体が納まる事を、セトは確認して神々に告げました。
「この柩は我が兄オシリスにピタリと合った。それもそのはず、兄に合わせて作ったものだ！」
言うなり、セトは柩の蓋を閉じ、神々の前に立ちはだかったのです。
セトに信服する下級の神が、この蓋をぴたりと閉じて、熱く焼けた鉛を流して封をしてしまいました。
神々は驚き、ざわめきましたが、猛る神と化したセトを怖れて、誰も柩に近付けません。
「妻ネフティスとその腹の子よ、見るがいい。私からの贈り物だ。
その子の父は罪を裁かれ、このような目に会わされる！」
封をされたオシリスの柩を、荒ぶる神セトは軽々と持ち上げ、そしてナイルの流れに投げ捨ててしまいました。
イシスの嘆きは非常なものでした。

投げ捨てられたオシリスの柩を求めて、川辺をさ迷ったのです。
どの辺りまで来たのでしょう。二つ国には属さぬ小さな国で、オシリスの柩をイシスは見つけ出しました。
その国の王宮で、柱の一柱として、玉座の前に建っていたのです。
と、いうのもこういう事情です。
セトによってナイルに投げ込まれたオシリスの柩は、その後、デルタを抜け青海原を渡り、ビュブロスという国の浜辺、ガジュマルの木の根に引っ掛かったのです。
神の力が滲み出し、ガジュマルの林を大きく育みました。
そして、オシリスの柩は、そのガジュマルの中へと包み込まれてしまいました。
この木は中でも太く立派に育ったので、切り倒され、国王に献上されたのでした。
こういう訳で、ビュブロスの王宮では何も知らずに天井を神に支えさせていたのです。

どうにかして柩を取り戻したい。こんな仕打ちを受けるのも、これも理を乱した罰なのでしょうか。
イシスは人に化けて、機会を覗っておりました。オシリスが犯した罪も、その贖罪として科せられた罰も、人間たちの間には知れてしまったことでしょう。
これを気付かれる事なく、柩だけを密かに持ち去りたいのです。
人々の目に夫オシリスの無残な姿を曝け出すことなど、イシスには耐えられないのでした。
その国の王妃は子供を身篭っておりました。そこで、イシスは乳母となり、王宮に入って密かに夫オシリスを守って暮らしておりました。
やがて王子が誕生し、イシスがその子を見るにつれ、これは偉大な王となろう、との予感があります。
イシスは女神の力でこの子に神の身体を与えてやろう、と考え、魔

術の秘儀を行ったのでした。
夜な夜な行われる秘儀の作法は、しかし、良くない心を持つ者に疑いを与え、その者のつまらぬ忠告のために、ある日、王妃はイシスの部屋を盗み見てしまいました。
王妃は、今、まさに燃え盛る火に投げ込まれようとしている我が王子を見たのでした。

？　イシスの毒蛇

女神イシスが呪文を唱え、王子を火に投じようとしたその時でした。
絶叫と共に、王妃が部屋へ駆け込み、イシスの腕から王子をひったくってしまいました。
イシスはおおいに怒り、その正体を見せて王妃を叱りました。
「お前はなんという事をしでかしたのだ、せっかく我が力を持ってこの王子を神の列に加えてやろうと思っていたのに、お前のような愚かな母のために台無しになってしまったではないか！」
王妃は、目の前に現われた神々しいイシスの姿に唖然とし、そして、床につっぷし、許しを乞いました。
「おお、女神よ。お許し下さい。
我が身が神でないばかりに、愚かな過ちを犯してしまったのです。
子を案じる心が貴女さまの邪魔をしてしまいました。どうか我が子だけはお許しを。」
王妃の言葉を聞いたイシスはさめざめと泣き出しました。
愛するがゆえに犯した過ちなど、誰に裁く事が出来るというのでしょうか。
そして、女神はただ、王宮の柱を下さい、と王妃に訴え続けたのでした。

オシリスの柩は、どうにかイシスの手に戻りました。
イシスはエジプトの地に帰り、デルタの茂みにこの柩を隠しました。
そうして、天の河をゆく太陽の船の進路の下を、何日も何日も歩み続けたのでした。
やがて、イシスの待っていた瞬間が訪れました。
老いたる神ラーは、うたた寝をしていて、その口からはだらしなく涎がこぼれ出ておりました。
慌てて目を覚ましたラーは急いで口元を拭き清めましたが、それで

も僅かに一滴だけ、ラーの身体から血にも近しい液体が、大地の上へと落ちたのでした。
急いでイシスはこの土をひろい、瞬く間にこねあげて粘土の蛇を作りだしました。
地上で姉が何かしている事は、弟セトにも判りましたが、いったい何をしているのかが、一向に判らないのです。
セトはついに諦め、太陽の船と共に西の山陰から地下の国へと降りてゆきました。

日が昇る時をイシスは待ちわびました。
粘土の蛇は魔法を受けてとても強力になりました。
いかに神々が護ろうとも、ラーの傍へと音もなく近付いてゆくことでしょう。
やがて、太陽の昼間の船が現われました。ラーに向けて、イシスは蛇を放ちました。
するすると進んでいった魔法の蛇は、神々に気付かれることもなく、ラーに近寄ります。
そして、突然、音もなくラーに襲いかかったのでした。
ラーは痛みに呻き、うずくまりました。神々には、何が起きたのか解かりません。
「毒にやられた！　蛇に噛まれた！」
ラーの悲痛な声を聞き、ようやく事態を飲み込んだセトが叫びます。
「何者かの呪いが見える！　でなくて何故、誰も気付かず船に近寄れるものか！」
そうして、蛇の姿を求めて辺りを見廻し、そして地上を見下ろしました。
イシスは隠れて見えません。
セトはなおも姉の姿を探していましたが、ラーが苦痛に顔を歪め、セトを怒鳴りつけたために諦めました。

「イシスを呼べ！　我が曾孫に当たる女神を！
その魔術に比類するは我以外にない、あの魔法の女神を呼ぶのだ、今すぐに！」
そのイシス以外に魔法の蛇を差し向ける者などありはしない、とセトは言い掛けたのですが、思い留まり、船を止めさせるべく、ひらりと舳先から飛び降りると、もう一人の兄ホルスの元へと駆けつけたのでした。
中空で太陽の輝く船が止まるのを見届けてから、イシスは改めて隠れていた岩の隙間から姿を現わしました。すぐに、天からの使いがイシスを見つけ、女神を空へと導きます。
弟セトの睨む中、平然と心配げな顔を装って、イシスはラーに近付きました。
「どうしたのです？　太祖の神よ。」
ラーの代わりにホルスが答えて述べました。
「魔法の蛇だ、何者かの悪意によって、始源の神ラーは苦しんでいる。
これを癒せるのは、我が妹イシス、お前だけと仰せだ。」
「何者の仕業かが解からねば、手の打ち様もありませんが、手をこまねいていては、ラーの命にも関わりましょう。」
手をかざし、優しい光が蛇から受けた傷口を包み込むのですが、恐ろしい毒の泡がぶくぶくと吹き出るばかりで、何の効力も現われません。
「これは我が力でもどうにもなりません。ラーのお力をお借りしなければ、とうてい無理。
さあ、私だけにお告げ下さい。ラーのお力を自在にする鍵となる御名を。」
「我が名は幾重にも秘されたるもの。その真実の名を知る者は我以外にない。」
呻き声と共にラーの口からこぼれた言葉に、イシスは眉をひそめます。

神の名は、広く知られる公の名と、隠されたる真の名があるのです。
その真の名は、神の力と本体を表す重要な名なのでした。
ラーはもちろん、他の神々も、決して誰にもその名を教えることなどないのでした。
「ラーよ。この蛇の毒、これには他ならぬ貴方の力が蠢いているのです。
これでは、私にもどうにも出来るわけがありません。貴方の力は貴方の力のみで消し去れるのです。」
苦しい息の下から、ラーは絶え絶えに言いました。
「他の者は近付くでない、決して決して、近付いてくれるな。・・・
我が秘めたる名をイシスのみに明かそう。
イシスよ、この名だけは他の何者とても教えるなかれ。」
聞こうと思えば聞き取れる距離で、しかし他の神々はラーの命を守り、耳を塞いでおりました。
そうして、魔法の女神イシスのみが、この秘めたるラーの名を知ったのでした。

「おお、ラーよ。偉大なる太祖の神よ。
その力、その永遠にも近しい時の流れよ、この世の全ての事どもよ、我に従え。
我、イシスの呼び掛けは、太祖たる者の秘したる名において絶対となる。
毒よ、ラーの身体より消え去るべし。」
途方もない力が動くのを、イシスとその場に居わす神々は感じました。
この世界を動かす力、ラーの真実の力がさざ波のように打ったのです。
ラーの、色を失った顔には血の色が差し、冷たかった手足にも温もりが戻ってきたのでした。
そうして、イシスは確信するのでした。

これで我が夫オシリスを甦らせる準備が整った、と。

さて、太陽の船での騒動が収まり、魔法の女神イシスが地上へ戻ると、ラーの周りを警護していた神々は揉め始めました。いったい、誰が責任を被るべきなのか・・・、ラーは助かりましたが、犯人は結局見つかっていないのです。

「そもそも天の河で蛇を見張るのはセトの役目。それを果たせなかったのだから、非はセトにあろう。」

火のようになり、セトも抗議の声を挙げます。

「あれはラーの力が働いていたのだ、それを見付ける事など不可能に近いわ！」

また、大ホルスも言いました。

「何より、蛇を遣わした魔法の主が知れないのだ。天の理を乱し、一瞬とは言え、時間を止めた。

これには大きな代償を求められるであろう。」

理を乱せば、結局は自身に返るのです。神々も、それをよく知っておりました。

最後にラーが重い口を開きました。

「セトよ、大地の上へ降りるがよい。王としても、我の守護としても、今のお前は片手落ちじゃ。

地上の王としての役目から逃れる時まで、我の元へは戻らぬが良い。」

口の端を噛み締め、セトは無言で従いました。

？　ホルスの誕生

オシリスが河へ流され、イシスも二つ国を離れている間に、セトはオシリスの後を継いで王となっていました。
今までは、ラーを護るため共に太陽の船で天に居たのですが、あの時以来、船を降ろされ地上に居ることとなりました。
セトは大変に頭の良い神でもあったので、常に妹や姉の事を気に掛けておりました。
イシスがとある国で兄オシリスの柩を見つけ、それを持って二つ国へ戻った事も、セトには筒抜けなのでした。
そして、女神二人が居ない日を見計らって、兄の遺体を見に行きました。
柩の中までは、天の河からは見えないのです。
罪人は黒くなり、その肉体はすでに土に返ってしまったことでしょう。
しかし、セトが柩の蓋を開けて見たところが、オシリスの肉体はまったく以前と変わらず、まるでただ眠っているだけのようなのです。
セトは悪い考えを起こしました。

イシスとネフティスが戻って来ると、恐ろしい事はすでに起きた後でした。
柩の中は空になり、そして、女神は河の魚に事情を尋ねました。魚は見たままを女神に語りました。
セトがやってきて、兄であるオシリス、今は罪を許され二つ国に戻ったその遺体を引きずり出して、１４に引きちぎり、それぞれの方角へと力任せに投げ捨ててしまった事を。
またしても、女神たちは兄であり夫であるオシリスの遺体を捜し出さなければならなくなってしまいました。
「夫がまたしても死んだ。我が魔力で、あとは甦るだけだった我が

夫が。」
イシスの嘆きは深く、その嗚咽は絶望の淵へと沈んでゆくのでした。
大ホルスの予見した通り、罪はまたたく間にイシスの元へと現われたのです。
嘆いた女神はそれでもオシリスのバラバラにされた手足を求めてさ迷いました。
全ての魚と鰐と鳥に命じて、オシリスの身体を探させました。
やがて、オシリスの身体は１３までが集められましたが、どうしても、最後のひとつが見つかりませんでした。
それは、まさにオシリスが罪を犯したその部分だったのです。

仕方なく、イシスはそれを別の物で間に合わせて、オシリスの身体を繋ぎ合わせました。
ネフティスの子供アヌビスが、これを巧く繋いでくれたので、この時から、アヌビスはミイラ作りの神となりました。
太祖ラーの力さえ、今のイシスには自在です。かつて、遥かな時の彼方でラーが世界を創造したように、新しい秩序を呼び込もうとしました。死者を復活させるのです。
「あまねく世界の全ての者どもよ、聞け。
我、イシスと太祖ラーの隠されたる真の名において、秘められし禁断の法を解く。
死の門よ、死せる王のために今一度開け。
地底の河、天の河に潜みし幾多の邪悪なるものよ、道を開けよ。
豊穣の神、黒き大地の神、定められし地上の王、我が夫オシリスよ、甦れ！」
魔力は渦巻く雲となって空を埋め、怒涛のように地底へと突き刺さりました。
巻かれたばかりの白い抱布が薄く輝き、オシリスの身体がぴくり、と動き始めます。
そうしてイシスは、ようやく夫オシリスを甦らせたのでした。

「おお、地上を統べる真実の王よ、よく戻られました。私はこの日をどれほど待ち望んだ事でしょう。
さあ、早く、あの憎い弟セトを王座から引きずり降ろし、その座に収まり下さい。」
しかし、オシリスは首を振り、イシスを優しく抱き寄せ、諭すのです。
「我が妻イシスよ、聞くがよい。私の犯した罪は深い。
この罪が許されるのは、真実、弟セトに許された時のみなのだ。
深く傷付け、侮辱した私の代わりに、セトは良く勤めてくれている。
魔法の女神よ、誤まるなかれ。我は我の犯したる罪のため、この地上を去るのだ。」
オシリスの真実偽りなき愛情が妻イシスに注がれ、神の力がその中に一つ種を植えました。
やがてイシスはホルスを宿しました。
オシリスは身体が一部分欠けているために、長くは地上に留まっていられないのです、そのためオシリスは、この子を見る事は叶いませんでした。
神々はオシリスを地下世界の王として、死者の国を治める神と定めました。
これで、運行の難しい地下の川も少しは楽に渡れるようになるでしょう。
また、セトが王の座を去った時には兄と弟、二人が毎晩顔を会わせる事にもなり、あの夜刻まれた深い溝をも埋めてくれることでしょう。

さて、地上は変わらずセトが治めることとなりました。
王となったセトの治世はもっとも厳しい時代を呼びました。
けれども、新しい秩序と法が人々の中にしっかりと根付くためには、もっとも適した時代ともなりました。
ある時、セトは姉イシスと妹ネフティスが川辺でひっそりと暮らし

ているという噂を耳にしました。
そして、さっそく迎えに行き、無理やり城へと連れ帰ったのでした。
「兄オシリスが心配していたのでな。不本意ではあるが、面倒を見てやる事とした。
だが、兄との約束は住まいのことのみ、それ以外は預かり知らぬ。」
冷たく突き放されてしまったので、二人の暮らしは相変わらず質素なものでした。
セトはやはり、二人の兄妹を許す気にはなれなかったのです。
そして王宮で、イシスは王子となる息子ホルスを産みました。
オシリスの息子ホルスの誕生です。
イシスは心に決めている事を、今こそ実行しようと考えていました。
そのためには、太祖ラーにどうしても会わなければなりませんでした。
幼いホルスを連れ、イシスとネフティスは王宮を抜けだしました。
手助けをしてくれたのは、オシリスと共に地下の国で死者の審判を勤めている、智慧の神トートでした。
「知恵ある神セトを出し抜く事は至難の技。きっと、二人の考えも見抜いているであろう。
王宮を出れば、その時から、その子の受難が始まろう。それでも行くというのなら、我の力で二人を助けよう。」
イシスは答えて言いました。
「王宮に居るかぎり、この子の命は安泰でしょう。しかし、この子の未来は闇に閉ざされてしまうのです。
あの弟がオシリスの血を引くこの子を見逃すはずはありません。
オシリスの血に、その王冠を授けるわけなどないのです。
いつかこの子は正当な権利さえ奪われてしまうでしょう。」
それを抑えられるのは、もはや太祖たる神ラーしか居ないのです。
それを二人の神も知っておりましたので、何としてもホルスを守り育て、成長した姿をこの絶対の神のお目に掛けようと誓ったのでした。

「では気をつけて行くが良い。
しかし、ラーに謁見する時を、必ず選ぶことだ。早まって時期を違えると、取り返しのつかない結末となろう。
よいか、くれぐれも時期を誤まってはならぬ。」
赤子のホルスと母イシス、ネフティスの三人は、こうして王宮を逃れ出たのでした。

王であるセトに、この脱出はすぐに知れてしまいました。
けれどもセトは厄介払いほどにも考えてはおりませんでした。どうせ、王位は自分のものです。
これは揺るぎない事実でした。
取り巻きの下級の神が、この王に提言しました。
「あの女神たちを放っておかれるのですか？
心配の芽は早いうちに摘み取ってしまわれてはいかがでしょうか？」
答えてセトが言いました。
「気に掛ける事もない。この裁定は太祖たるラーの決定。
私には何の非もありはしないのだ。」
「しかし、王よ。
あの幼子が成長し、やがては王の地位を脅かすことにはなりますまいか？
すべてこの世の秩序も法も、太祖ラーの指先ひとつです。」
その言葉は見えざる毒を含み、賢き神セトですらをも、一末の不安に陥れるに充分でした。
とくと考え、セトは追跡の兵を指し向かわせました。

さて、ここにババイという名の神が一人おりました。
この神は、先の王オシリスと誰知らぬ女との間に出来た子供なのでした。
それをイシスが母とし、二人の神の子供としたのです。
正妃イシスと、王オシリスの願いの元に、女は我が子を手放したの

です。
義母の姿が見えないことに、ババイは戸惑い、伯父であるセトに詰めよりました。
「お前の母は、お前を捨てて出て行った。赤子のホルスも一緒にな。」
セトの言葉は冷たくにべもありません。
ババイは乱暴者で伯父に似て激しい気性の持ち主でした。
父と母を深く恨み、のちに父オシリスの元へと追いやられても、その庇護を受けることを拒むほどに、この両の親を憎んだのでした。
オシリスは深く悲しみ、心を痛めたということです。

？　蠍の女神テフヌト

セトの気が変わり、追っ手が差し向けられた事を、イシスとネフティスは知りました。
ナイルの下流、デルタの沼地まで逃げ込めれば、セトの力でも容易に探し出す事は出来ないでしょう。
デルタには、イシスの力を強める聖地があるのです。
「砂の中にて息を潜めし者、聞け。我の為に敵を屠る力持てる者よ、我と我が子を救い給え。
この正当たる王の子を。」
この呼びかけに応えたのは、砂漠の砂の中に姿を隠す、蠍たちでした。
イシスはそのうちの特に力強き者を7匹選んで、ラーの名の元に、魔法で神の力を与えました。
それぞれが名前を授けられる事により、それが叶うのです。
それぞれは、メステト、メステテフ、ペテト、テテト、マテト、ペフェン、テフヌトの名を掲げたのでした。
一番強力な毒を持つテフヌトは、7人の神の纏め役です。
「私の足跡を消しておくれ。そして、敵から身を隠すために葦の茂みへ案内しておくれ。
セトの名を呼んではなりませんよ、お前達は砂漠の者。赤い神の名を呼べば、即刻、魔力が襲い来るでしょう。黒い神の名を呼ぶのです、我等が信じる唯一の王を。」
イシスは他にも、関係の無い者には関わらぬ事、何かあればすぐにイシスに伝える事を蠍たちに命じたのでした。
鰐の頭を持つセベク神を奉る街、クロコディロポリスへ差し掛かった時です。
そこはまだ、セトの力の及ぶ土地だったので、一行は慎重に進んで

おりました。
と、一行の行く手に集落が現われました。
何も告げず、通り過ぎようとするイシスに、この部族の族長の妻が気付いたのでした。
イシスが恐ろしい蠍を供に付けているのを見て、女は悪し様に一行を侮辱し、男達を呼び、矢を射掛けさせたのです。雨のように降り注ぐ矢に驚きながらも、イシスは魔法を使いません。
騒ぎを起こせばセトに見つかる、女神たちはただ逃げるしかありませんでした。
弓矢が一行に当たらなかったのは、ひとえにセベク神の加護によるものだったのです。
セベクにとっても、セトに知られず密かにイシスを助けるには、これが精一杯なのでした。
やがて一行はデルタの入り口にほど近い、青海原付近の浜へと辿り付きました。
そこに、漁をする貧しい女の家がありました。
訳は隠したまま、一夜の宿を願ったところ、女は機嫌よく一行を招き入れてくれたのでした。

イシスは身分を隠したままです。女の親切に応えようと、麻紡ぎを手伝ってから、眠りにつきました。
ひどく疲れておりましたので、とうてい仕事など出来ようはずもないのですが、無理をして麻を紡いだのです。
二人の女神が、疲れ果ててすっかり寝入ってしまうと、密かに起き出した7匹の蠍たちは相談を始めました。
あの族長の妻に、思い知らせてやらねば気が済みません。
イシスが黒い神オシリスの名を持って戒めた事も、赤い神の支配する砂漠で暮らしてきた7匹には通じなかったのです。
優しさと、罪を許す気持ちは、女神たちにはありませんでした。
7匹の中でも特に毒の強いテフヌトは、恐ろしい早さで草原を抜け、

あの部族の集落へと戻ってきました。
そして、族長の妻が抱いて眠っていた子供の足を、その鋭い爪で射し貫いたのです。
子供は悲鳴を上げる間もなく、見る見る弱ってゆきました。
顔色は白くなり、手足は夜の泉の冷たさです。妻は悲鳴を上げました。
気が済んだテフヌトは、さっそくイシス達の元へと帰りましたが、これをイシスが知らぬわけがありません。
貧しい女のみすぼらしい家には明りが灯り、入り口では、残る６匹の蠍を従えたイシスが待っておりました。
「お前達はなんという事をしでかしたの。幼い子供に、何の罪咎があるのです？
もう良い、お前達。７匹揃って砂漠へお帰り。」
イシスの怒りに、慌てて７匹は許しを乞うたのでした。

「お許し下さい、女神イシスよ。
我等のみでなく、貴女さまにまで及ぶ、あの仕打ち。我慢がならなかったのです。
子供の命を奪うつもりは御座いません。
少しの毒を、ほんの少しの間だけ苦しむ程度にしか与えてはおりません。」
イシスは首を振り、言いました。
「今までよく助けてくれました。礼を言います。
しかし、お前達はやはり赤い神の名を呼ぶべき者たちなのです、だから、我と我が子の居所を、お前達の仕える神が尋ねたる時には、答えてしまうのですよ。隠す必要はありません。」
７匹の蠍はうなだれて砂漠へと帰ってゆきました。
蠍たちが消えて居なくなると、イシスは沼地へと急ぎました。
族長の息子は、息絶え絶えになり、今にも死んでしまいそうでした。
「その子供を渡すのです。我が魔力によりて、命を救いましょう。」

狂人のごとくに狼狽える族長の妻から、イシスは子供を取り上げます。
そして、魔法を呼び覚ますのでした。
「我がイシスの名において命ずる、テフヌトの毒よ、地に落ちるがよい。
我を守護したらん7匹の蠍、その女神たちよ、その誇りによりて更に命ずる、毒よ、幼く弱き者から去れ！」
瞬く間に、子供の息は吹き返り、うっすらと目を開けるほどに良くなりました。
族長の妻は、何度も何度も礼を述べ、非礼を詫びたのでした。
そうして、その部族の者たちは、誓ってイシスと幼いホルスに忠誠を尽くそうと言うのでした。

デルタの聖地には、先回りしたセトの兵が待ち構えておりました。
うかつに近付く事も出来ず、イシスはこの地で暮らす事をあきらめました。
仕方なく、青海原に近いケミスと呼ばれる土地で隠れ暮らす事としました。
女神二人が一緒に居たのではセトに容易く見付けられてしまう、ネフティスはクロコディロポリスに戻る事を決めました。
あの地に留まり、もし、セトが近付いて来たなら、あの夜助けたあの部族の力を借りて、姉イシスに危険を知らせるつもりでおりました。
二人は離別を惜しんで泣きむせび、そうして姉は妹を見送ったのでした。
別々の土地で、離れて暮らし始めた姉妹でしたが、二人の暮しは同じほどに貧しいものでした。
血眼になって探し廻っているセトの目を逃れる事は、あの時トートが言ったように、至難の技だったのです。
食べ物を探し、人に乞う生活が続きました。

ある日、食べ物を探して遠くの浜まで下りていたイシスの元へ、クロコディロポリスからの使いがやって来ました。イシスとホルスに忠誠を誓った、あの部族の者でした。
「セトが・・・、蠍の話を聞き付けて、クロコディロポリスに兵を差し向けて来ました。
妹君は連れ去られ、ここにも追っ手が迫っています。すぐに王子を抱いて、お逃げ下さい。」
顔色を変えたイシスは急いで家へと戻りました。
まだ、セトの兵は到着してはいないようでした。
しかし、家へ一歩踏み込んだイシスはその場で石像のように動けなくなってしまったのです。
籠の中に入れて寝かせておいた、ホルスの姿がないのです。
「ホルスが・・・！」
一言言うなり、イシスは外へと飛びだし、絞るような絶叫を上げて走りまわりました。
我が子ホルスの姿を捜し求めているのでした。
太陽の船は中天です。
ラーはトートに指を差し、続いて地上を指し示しました。
トートには、これだけで何を言わんとしているのかが判ったのでした。
朱鷺の姿を取って、智慧の神トートが降りてきました。
叫び声を聞き付けた蠍の女神セルケトも駈けつけてくれました。
そうして、セトの元から再び逃げ出したセトの妻ネフティスも、騒ぎに気付いて駆けつけたのです。
「おお、何ということ！
私が知らせを送ったと言うのに、間に合わなかったのですね！？
ようやく夫の元から逃れ、駈けつけて来たと言うのに！」
女神の言葉を聞いて、トートは言います。
「それは拙い。貴女の後を、敵も追って来るだろう。

女神は気が付かないかも知れないが、セトの気持ちは完全には消えていない。
逃げれば更に、荒れる神の怒りを増やすだろう。」
闇の女神は、とっさに思い付きました。
「では、私がセトを引き付けておきましょう。兵士達を止めさせましょう。
その間に、智慧ある神よ。必ず、必ず、姉の命の息子ホルスを甦らせ給え。」

？　セトとネフティス

ネフティスがデルタの中ほどに、突然姿を現わしました。
闇に命じて、そこここに深い闇と霧をたちこめさせたのです。
鬱蒼としげる森の中では、昼も夜も区別がないのでした。
ネフティスの魔力に気が付いた夫セトは、すぐに駈けつけて来ました。
そうして、怒りに燃え立つ瞳で、この不貞の妻を睨みつけたのでした。
「この先には、兄オシリスの忘れ形見、幼く弱いホルスが居るのです、誰も罷り通るなかれ！」
「愛しい兄上の一粒胤か、そんなものはとうに木の根に食わせてやったわ！」
ネフティスは、息が止まるほどに驚き、怯えました。
セトの恨みのあまりの深さに、深淵を覗く思いがしたのです。
「おお、兄上・・・。なんという恐ろしい事、なんと深い罪を犯してしまったのです。
いたいけな幼子を手に掛けるとは。」
セトは知っておりました。この先、デルタの中にはイシスとトートが居ないことを。
それでも騙された振りをしているのでした。
「そこをどけ、これで決着がつくのだ。我は赤い神、砂漠の神。
油断をすれば命を落とす。」

「では、私を殺してお行きなさい。」
ネフティスが腕をひろげ、セトの前に立ち塞がります。
「お前の産んだアヌビスは、王にはなれぬ。名も無き女が産んだ子もな。
始めに産まれた、遇されるはずの子が、遇されぬようになる、その

ような偽りの法を創るのか。」
イシスの成そうとしている事を、セトはやはり知っていたのです。
ネフティスは涙を浮かべて言いました。
「我が子アヌビスは不貞の子。もとより、兄オシリスの地位など継げるわけがないのです。
産まれながらに罪を負うているのです。」
セトの、憎い思いが揺らいでいました。
苦しみはいや増すばかりで、王冠を手に入れたところで、一向に晴れることなどなかったのです。
「我にこれ以上の侮辱を重ねるならば、止むを得ぬ。殺してでも罷り通る。
だが、この先に姉イシスの姿はない。お前ごときに謀られる我ではない。
共に王宮へ戻るならば良し、拒むならば兄オシリスと同じ道を辿る事となろう。」
最後の言葉には力が漲っております。本気で殺すつもりだったのです。
厳しく、賢い神セトの、この意外な言葉にネフティスは、トートの言葉を信じる気持ちが現われてきたのでした。
厄介払いほどに思われていた妻の座は、赤き王にはまだ重いものだった事を知ったのです。
「私の座には、新たな女神が座るはず、どのような企みを秘めておいでです？」
「企みなどない。
可愛いい妹が窮地に陥っているのだ、救いの手を述べてやるのが兄たる者の役目。
その同じ目的でいるものを、姉イシスが妙な勘ぐりを入れるだけの事。
つい先程も、甥っ子が死んでいるのを見掛けたゆえに、先に兄の元へ送ってやったまで。

姉、イシスに聞くが良い。太祖の時と同じ事よ。」
このセトの告白で、ネフティスは自分のみでなく、姉イシスまでもが深い罪を犯してしまった事を知らされたのでした。
呆然とする妻の手を乱暴に捕え、赤き王はデルタの出口へ向かいます。
「なぜ、私を取り戻そうとするのです？」
「王座の後ろには王妃が従っているもの。
いや、お前のような女に、まだ愛想が尽きぬせいだ。」
女神の夫は憎々しげに言い放ったのでした。

デルタの地域はセトの差し向けた兵で埋め尽くされていました。
これでは、姉イシスと智慧の神トートが見つけ出されるのは時間の問題です。
二人が見つかれば、木の根元に埋められたホルスを捜して甦らせる事も叶いません。
ホルスは、姉イシスの命です。これを奪われては、イシスは生きてもいけないのです。
兄オシリスの血統などはもう、この女神にはどうでも良いことでした。
そこでネフティスはもう一度、命懸けで夫を誘惑しようと考えたのでした。
「我が夫、二つ国を手にしたる王よ。貴方の慈悲に縋りとう御座います。
なにとぞ、我をお連れ下さい。そして、その腕に強く抱いて欲しいのです。
逃げ出す気力も萎えるほどに、激しく。」
しかし、容易に誘惑の魔力には冒されないほどに、セトの心は頑なになっておりました。
妹たる女神の艶めかしい視線にも屈することなく、その真意を観察しておりました。

そして、ことさらに疑いの眼差しを、妻ネフティスに向けたのです。
兄オシリスとの裏切りの夜が、未だに許されていない事を思い知り、
ネフティスは我が心中に悲しみが溢れ出る様を感じました。
どれほどに苦い夜を数えたのでしょう、憎しみを募らせたのでしょう。
夫セトの、過ぎし歳月を思うにつれ、妻となりし女神は罪の念に縛られるのでした。
とうとうネフティスは跪き、言いました。
「許して下さい、セト兄様。
もとは、貴方の心を向けたいがために犯した罪なのです。
おお、信じて下さい、愛しい夫よ。」

本心から発せられた言葉には、魔力が宿るのです。
その言葉は、どんな誘惑の魔法よりも強く、赤き神セトの心に打ちつけました。
「判った、一度は許そう。さあ、王宮に戻るのだ。」
そして、ネフティスは再び欺きの言葉を続けたのでした。
「お待ち下さい。・・・このままでは、嫌です。
私は罪深い身。それゆえ、人の目がとても恐ろしいのです。
王宮へ帰れと仰せならば従います、けれど代わりにお願いがあるのです。
人々には、決して姿を見られたくないのです。それとも私を晒し者になさいますか？
我が願いを聞き届けて下さらぬなら、動きません。
我が身が遠く、隠れて見えぬほどの兵士で、我が周りを固めて下さらなくては。」
そうして、その場にぺたりと座り、牛のように腰を据えてしまったのでした。

拗ねてしまった妻を再び立たせる事は困難でした。

ついにセトは引き連れた全ての兵をその周りに配する事を約束してしまったのです。
もちろん、この賢き神には、その願いが姉イシスの為である事は知れているのです。
それでも、天秤は妻に傾いたのでした。
「解かった、お前の望む通りにしてやる。それで満足か！」
頭から湯気を吹き、ついにセトは苛立つ声でそう答えたのでした。
これでホルスは救われます。
イシスの命たる息子、オシリスの血統のホルスが、きっと智慧の神トートと魔力の女神イシスの力で甦るでしょう。
「我が子ホルスよ、聞き給え。
我と我が名と、叡智の神トートの禁忌、太祖の秘めたる一つ名に依りて、この世へ再び立ち戻れ。
今、再び、父の大地へ姿を現わし、踏みしめよ。
地の底より、帰り来れ。」
秘められたラーの力は強大です。
砂煙を巻き、荒野を行くセトの兵士たちの上にも、その魔力ははっきりと見てとれたのでした。
「ホルスよ、命拾いをしたな。」
舌を鳴らして悔しがる二つ国の王は、けれど、後ろを振り返りもしなかったのでした。

？　ラーの天幕

最大の危機を乗り越えたホルスは、すくすくと育ってゆきました。
今では強い力を持つコブラの女神ウアジェトが王子の守護となり、
いつでも付き従っているのでした。
ネフティスの献身で、強敵セトを追い返したものの、いつまた気が
変わって襲いかかってくるとも知れません。
イシスはじりじりと待ち侘びておりました。
太祖ラーに謁見するその日をひたすら待ち続けているのです。
今日なら良いか、明日には行けるか、と、守護のウアジェトにも毎
日尋ねるのでした。
そうした中で、赤子のホルスは、少年ホルスへと成長しました。
そんな折、イシスの聖域のほど近く、デルタの中のとある場所で、
神々の宴が催される事となりました。
ヘリオポリスから出て来ることの少ない、神々の中でも特に偉大と
呼ばれる神々が集まるのです。
その中には、本来ならば、夫オシリスが座っているはずだった場所
に座す、セトの姿もあるのでした。
それらをも含めて、イシスの我慢はもう限界へと達していたのでし
た。
セルケトやウアジェトなど、女神たちもイシスに賛同しました。
この機会は、時期が訪れたる証拠であると決めたのです。
少年ホルスは強く逞しく育っていました。
女神たちは、トートにすら何の相談もなく、決定してしまったので
した。

デルタの島へ渡るには葦の船に乗って河を行かねばなりません。
渡し守はアンティという名の位の低い神でした。
イシスとホルスはこのアンティに頼んで河を渡してもらい、神々の

座へと進み出ました。
その場には、シュウ、テフヌト、ゲブ、ヌト、トート、大ホルス、ネフティス、セトなどの神が、畏い従う始源の神ラーの傍に控えており、さらにその後ろには、多くの位の低い神や精霊がこれを取り囲んでおりました。
そこへイシスとホルスが現われました。
「ラーよ、そして太祖の神に連なる大いなる神々よ。この座を騒がせる無礼をお許し下さい。
我が名はイシス、そしてこの子が真実地上の王たるオシリスの息子、ホルスです。
神々の加護を得ましたおかげで、この子はこんなにも逞しく育ちました。
この成長した姿をぜひ、お目に掛けたく罷り越したのです。」
女神イシスが背を押して前へ出された子供を見て、神々は微笑み迎えました。
しかし、イシスの来訪の本当の目的はこのような事にはありません。
ただ神々に我が子を見せるためだけに、ここへ来たわけではないのです。
続けてイシスが言いました。
「我等がここへ来た目的はただひとつ、この子の権利を教えて頂くためなのです。
我が夫オシリスは絶対神ラーの定めたる真実唯一たる地上の王。
その夫が地上を追われたるは、そこに居るセトの為。
オシリスの王位を今更くどくは申しません。
しかし、その子であるこのホルスが、こうして無事に育ったのですから、王位はこのホルスのもの。」
一気に言葉を紡ぎ終えると、一息ついて、またイシスは喋り始めました。
「さあ、始源の神ラーよ、ご裁定を。
我が子ホルスはセトに代わり、二つ国の冠を授けて頂けるのですか

？」
神々はどよめき、小さな声がさざ波のように広がってゆきました。
ラーは、セトとホルス、双方の顔を交互に見やるのみです。
突然、セトが立ち上がりました。
「姉上。それは、私がその子供よりなお劣ると言いたいのか？！」
「いいえ、セト。
私は約束が欲しいのです、いずれはこの子に王位を明け渡すという確かな証拠を！」
セトの怒りを肌に感じて、イシスは訴えかけました。
この子を見れば、弟も納得をして引き下がると考えていたのです。
ここまで立派に成長し、王としての資質も充分に備えたホルスならば、と。
セトの隣りでネフティスはただ狼狽え、姉と夫の双方を見合わせておりました。
「馬鹿な、あれほど時期を早まってはならぬと聞かせおいたのに。」
智慧の神トートが呟きました。

神々の座は、どよめき、不穏な空気が渦を巻いておりました。
イシスの言葉は謎掛けのようなのです、確かに地上の王はオシリスでした。
しかし、オシリスは罪を犯して審判を受け、そうして今は地底に居るのです。
その後を継いだセトは、オシリスの次に産まれたる者であり、オシリスの跡を継ぐのは当然と思われます。
では、この子はどうなるのでしょう。
実は、その法はまだ出来てもいないのでした。
セトは一計を思い付きました。そうして、ホルスと姉イシスにこう言いました。
「来訪せし血族の者よ。よくよく考えられよ。
第一、姉上は筋違いの事で騒ぎたててておいでだ。

何ゆえホルスを内にして、姉上が我と対峙するのだ？
おかしいではないか。
もはや、一人前に成長し、我の冠を継ぐに相応しく、母からの離脱も果たしたからこそ、遣したはず。
・・・それが、なぜ母の後ろに隠れておるのだ？」
イシスは魔法の女神、言霊を操ることにも優れているのです。
その力は、王となったセトにすら、叶わぬところなのでした。
それを、ホルスによって、縛ったのです。イシスは言葉を奪われ、立ち尽くすのみとなりました。
「さあ、兄上の残せし息子よ、言いたい事があるならば言うがいい。
それとも、母に代わってもらう方が良いか？」
イシスの言い返そうとするところを、少年ホルスが先を制して述べます。
「伯父であるセトよ、我が父オシリスは確かに罪を犯したかも知れない。
けれど、それは次の王となった貴方とて、同じではないか！
父の遺体を引き裂いて投げ捨てた罪、我が母イシスと貴方の妻ネフティスを不当に縛った罪、そして、この私を殺そうとした罪はどう償うと言うのか！」
「聞き捨てならんな。
兄オシリスを引き裂いたるは、確かに激情ゆえの過ちだが、それは許される範囲のもの。
現に、事を知りおくラーも神々も、何も言いはしない。
・・・罪人が、なぜに黒く腐り落ちてしまわぬのか、我は不思議でたまらぬわ！」
怒鳴り付けた大音声に、場は静まり返り、その緊張をセトが自ら言葉の刃で切り裂きます。
「お前を殺そうとしたなどと、それこそ言いがかりとしか言えぬ事よ。
いったい、誰がそれを証言すると言うのだ、誰がそれを見たのだ？

第一、我がなにゆえ、お前のごとき子供を恐れねばならぬのだ！」
ホルスは怯みません。
「それは伯父上。すなわち私が正当たる王座の所有者だからではないのですか！
貴方より、さらに濃いオシリスの血が私には流れている。
真実、地上の王と認められしオシリスの血が、その根拠となる！」
「たわけた事を！
始まりを知らぬ無智なる者ホルス！
真実、唯一の王は、そこに控える太祖ラーのみだ！
その血を正当の根拠とするならば、我とオシリス、どちらも同じと知らぬのか！」
二人は一歩も退きません。
ラーの息子にして風の神シュウが中を割って提言します。
「待つのだ、二人とも。
そもそも王位はオシリスに継承された。それは、認めるのだ、セト。
だが、その時、ラーは約束された。
すなわち、最初に産まれ来たる者が遇されると。」
「順位で言っても、我がこの青二才より、充分に先だ！」
セトが早って答えます。シュウは掌でセトを抑えると、さらに続きを述べてゆきます。
「そう。
確かに一見はそう見える。しかし、違うのだ、セトよ。
王位はオシリスが継いだ。・・・では、王オシリスの血を引く者は誰だ？」
セトは、はっ、と気が付いたようでした。
「このような事、言いたくはなかったが、神々の裁定がそのような基準を取るならば、我も言わせて頂く。」
苦虫を噛み潰したようにして絞った声が、赤い神の喉から零れます。

？　カバの勝負

セトが持ち出したのは、オシリスの子供たち、特に実母を知らぬ長男ババイの事なのでした。
「この事はどう裁定を下すのだ、聞かせて頂こうか。
確かにそこのホルスはオシリスの息子、しかし、兄オシリスには三人の子が居る。
そのホルスは、末の子供ではないか。
兄の血を受け、順位にも優れ、真実、我が王冠を譲り渡すのはこのババイであるのか？！
なるほど、神々の中でも位の低い、この妾の子供にならば王位を譲ってくれよう。
神々よ、文句はあるまいな！」
多くの神々が、このセトの暴言には息を呑んでしまったのでした。
イシスは顔色を無くし、その場に立ち尽くしておりましたが、この時、ようやく口を開いたのです。
「我が夫オシリスの正当な後継ぎは、この私の産み落としたホルスのみです！」
そうして、そのまま、泣き崩れてしまったのでした。
「伯父上。私は今、真実、貴方が憎い。
母を傷付け、父を侮辱し、義兄を晒すなど、断じて許せるものではない！」
「何を言うか、そもそも貴様の父が我の誇りを引き裂いたことが全ての始まりではないか！
父に似て、お前も同じ事を成そうというのだ、世の理を乱して二つ国を取るのだろう！」
二人の神の激しい言い争いは終ることを知りません。
ついに、ラーが立ちあがりました。

「よさぬか！
もう沢山だ、酒もこれほどに拙くなり果てた！」
酒の杯を二人の足元へ叩き付け、ラーの怒りは頂点となってしまいました。
トートも黙って見ているわけにはいかなくなりました。
続いて立ち上がり、二人に言います。
「まあ、待て、聞くが良い。これはお前達二人で決めてよい問題ではない。
神々の裁定を仰ぐのだ。
さあ、神々よ。どちらがこの二つ国の王として相応しいか、意見を聞こうではないか。」
神々は互いを見合わせ、揉めに揉めたのでした。
「ラーの跡を継ぎ、二つ国の王となったのは、ホルスの父オシリスであろう。
ならば、その血がさらに濃いホルスこそ、次の王となるべき。」
「いや、そもそもオシリスが王となったのは、兄弟のうちで一番に産まれたる者であるから。
ならば、順当に言っても次はセトの番。」
神々は、なかなかに意見が纏まらぬまま、無為の時間を尽くしてゆくのでした。
「ラーよ、そして血に連なりし神々よ、聞け。
兄オシリスが王位を去った事をどう受けるのか。よもや、その罪人の血に冠を授けるつもりではあるまいな？」
セトの言葉は鋭く、空気を切り裂きます。
「では、貴方はどうなのだ？　セトよ。
誰しも何らかの罪を犯すもの。しかし、それを一々あげつらっていては、政事が滞る。
偉大なるラーは、全てを見通して御裁定を下されるのだ。」
トートが振り向く先では、太祖ラーが眉をいからせてこの様を睨んでおりました。

「さあ、我等が太祖たるラーよ、貴方の御裁定に従いましょう。」
「うむ。では我が裁定を下す。
まず、セトよ。お前は冠を返すのだ。
そもそも王位はオシリスのもの。であれば、その子が王位を継げば良い。
しかし、なにぶん、ホルスはまだ子供である。
これに政事を行わせるわけにはゆかぬ。そこで、セトがこれに代わって今まで通りに国を治めるのだ。」
この裁定には、セトもホルスも、ホルスの母イシスも納得出来なかったのでした。
「そのような裁定があろうか？！
ラーよ、かつてこの私に告げた言葉を忘れられたのか？
兄が罪を冒したる時には、正義の元にこれを裁くべきではないのか？！」
もっとも激昂したのは、セトでした。
確かにラーは、オシリスの王位継承を承諾させる時に、セトにはそう言ったのです。
・・・もし、オシリスが罪を冒した時には、好きにするがいい、と。
そして、次に順位に優れた者が王位を継ぐのである、と。
「兄オシリスの次に、世に産まれ出たのはこの私。ならば、次に二つ国の冠を取るのも私であるはずだ。」
その声に智慧の神が反対します。
「いや、オシリスの血にはホルスが連なる。王である者の次に生まれたのは、ホルスであろう。」
「ホルスより先に二人の兄が生まれた事を忘れたか？！」
「まあ、気を落ち付けて。
確かに、ホルスには上に二人の兄がいる。・・・すぐに王位に就けるわけがない、と言うのももっともだ。
なにせ、同じ立場の貴方がこれほど苦労して手にした王冠なのだか

ら。」
巧みな言葉を廻すトートに、セトは口を塞がれてしまいました。
「けれど、ホルスと貴方には一つだけ、違うところがあるのだ。」
「それは何だ？」
苦い顔をしてセトは問いました。
「貴方とオシリスは同じ母を持つ兄弟。・・・しかし、ホルスはイシスの息子。
オシリスの正当な后である者は、いったい誰か？」
神々の頭上の雲が、ぱぁっと晴れ渡りました。
たった一人の神だけは、しばらくの間、息を止めてしまいました。
「・・・そのような事、」
セトはようやく、トートの智慧に負けた事を悟ったのでした。

「では、百歩譲って正妃である者の血が優先されるとして、ならば我とホルスのどちらがより、優先されるべきなのだ？
・・・いや、もういい！
これ以上はどうせ、誰にも判定など出来ぬのだ、ホルスよ！　我と勝負をせよ！
それによって、どちらが真実、王に相応しいかを決するのだ！」
「受けて立とう！」
イシスの止めるのも聞かずに、ホルスは答えました。
「よし、では王に必要な力を比べてみようではないか。なにも武器や魔力を競うばかりが勝負ではない。
・・・カバに化けるのだ、そうして川底に潜り、息をひそめる時間を競おう。
水の重さは国の重さ、息が続かず先に音を上げた者が負けだ。」
「いいだろう、今すぐにでも。」
血気に逸る息子ホルスの返答に、イシスは気が気ではありませんでした。
なぜなら、イシスは知っていたからです。

この勝負、ホルスに勝ち目がないことを。
イシスは後悔していました。トートの言葉を浅くし、事を急いだ我が身の愚かさを。
セトは強い王です。これをどかせる事がいかに難しいかは、智慧の神トートでなくとも解かり切ったことなのです。それも、王としての力を比べてどかせるなど、まだほんの子供にすぎないホルスには、出来ようはずがないのです。
「このままでは私のホルスが負けてしまう、」
イシスはうろたえ、神々の後について、ナイルの浅瀬へと向かいました。
水辺へ着くと、二人の神は互いをひと睨みすると、丸々太った大きなカバに化けました。
ゆっくりと水の中へ進み、二匹が同時に水の中へと姿を消しました。
ナイルは何もなかったように、また静かになりました。

どれほど時間が経ったでしょう。
あまりにも長い勝負に、神々は飽きてしまいました。
ひとり、またひとりと、見物を止めて帰ってゆきます。
そうしてとうとう、我が子を案ずる母一人となってしまいました。
誰かが傍に居たならば、イシスの間違いを止めてやる事も出来たのです。
たった一人、取り残されたか弱い母は、心配のあまり、悪い考えを起こしてしまったのでした。

？　イシスの石像

イシスは密かに銛を一本、用意しました。
それを持って、二人が姿を消した葦の茂みへと船を近寄せます。
水中から、細かな泡が立ち昇っています、きっと、この下にカバがいるのです。
ホルスかセトか、イシスが考えようとした時、突然、泡が大きくなりました。
そして、カバが勢いよく水から飛び出てきたものだから、驚いたイシスは、構えた銛をそのカバに投げ付けてしまったのです。
カバは、ホルスでした。
銛を受けたホルスは苦痛にうめきます。
「ああ、どうして我が子を打ってしまったのか、」
慌ててイシスは綱を引き、ホルスに刺さった銛を引き抜いてやりました。血を止める呪文を呟き、傷を癒す魔法を掛けようとした時です。
そこへ、今度こそセトが化けたカバが水面へ浮かび上がってきました。
「母さん、止めて！」
ホルスの叫びも、もうイシスには届きません。
セトを撃たねば、ホルスが負けてしまうのです。
銛は、今度こそセトに命中しました。
「う、」
セトは脚に刺さった銛を抜くために元の姿に戻ります。
我が子を勝たせたいと願う気持ちがイシスをさらに駆り立てます。
セトが投げ捨てた銛は、風に攫われイシスの手に戻りました。イシスが魔法を使ったのです。
あっ、と叫ぶ間もなく、イシスはセトに近付き、銛を振り上げました。

「俺を殺すのか、姉さん！？」
セトの声に、イシスは我に帰ります。
イシスの手から、血に濡れた刃が滑り落ちました。
砂塵に紛れて、セトはその場から消えて居なくなりました。

「貴女はなんて事をしたんだ！
勝負に負けただけじゃない、僕はいい笑い者だ！
どんな手段であれ、セトが死んで、貴女が満足すると言うのなら、
僕の取るべき道はこうだ！」
涙を浮かべたホルスは腰の剣を抜き放ち、母に斬りかかったのでした。
イシスは石に変わっていました。その石の母を、ホルスは斬ったのです。
石像の首を抱えて、ホルスはアテなくさ迷いました。
愚かにも、敵とは言え弟である者を卑怯な理由で傷付けた母。
その母を殺してしまった自分は、さらに深い罪人です。
「ああ、これでは伯父上の言うとおりだ。
僕はまだ子供で、事の良し悪しも解からない。」
深く後悔し、嘆きましたが、もうどうにもなりません。ふらふらと、
丘を登ってゆきました。

しばらくすると、この場所へ万能の神ラーと智慧の神トートがやってきました。
「この石像はどうして首がないのだ？」
ラーは傍のトートに問い掛けます。
「・・・それは、イシスの変化したものです。兵士のいざこざにでも巻き込まれたのでしょう。」
トートの返事を聞くと、ラーは、この智慧者をじろりと睨み付けました。
「その昔、天より降るものは光だけだと言いおいたものを、どこか

の愚か者が破った。
その後、五つの大きな雨粒は、この世をかき廻し、かき乱し、神々を振り回したのだ。
・・・そのうちの一粒は、こんなところで目を瞑り、耳を塞いでおる。
・・・己の冒した罪がよほどに痛かったのだ。」
トートは言葉もなく、黙ってしまいました。
「では、次はホルスの番であろう。・・・神々に呼びかけよ、」
ラーは続けて言います。
「ホルスを、・・・あの、道を踏み外した愚かな子供を見付けて、我が前へ連れてくるのだ！」
さあ、ラーの怒りはよほどに激しいと知った神々は、皆、急いでホルスを捜しにゆきました。
ラーの怒りが、実はホルス一人に向けられたものではない事に気がついていたセトは、神々の中でも特に慌ててホルスの姿を探しているようでした。
そうして、このセトが、一番にホルスを見付け出したのでした。

ホルスは丘の向こう、森の奥の大きな木の根元で休んでいました。
歩き疲れて眠るホルスの傍に、セトは気付かれないようにそっと近寄り、いきなり襲いかかったのです。
セトはホルスの両目を抉り出すと、傍に転がっていたイシスの首と共に持ち去りました。
ホルスは、話せば聞き分け良く付いてくるでしょうが、セトは連れて帰りませんでした。
なぜなら、セトの胸には企みがあったからなのです。
ラーの天幕へと戻ったセトは、血に濡れた二つの目玉を高く掲げて言いました。
「・・・この通り、ホルスには我が罰を与えた。
己を産み出せし母を手にかけたのだから、その代償は目に見える世

界全てでなければ。
産まれる前と同じ、真っ暗な闇に戻してやったのだ。」
あまりに厳しいセトの処罰に、さすがのラーも眉をしかめてしまうのですが、構わずセトは続けます。
「ラーよ、これで我が甥への処遇は決したとみて宜しいか？
この二つ国の王が、このような意志弱き子供に務まるものなのか、あそこに控える不満げな神々にも知らしめて頂きたい。」
「む、・・・確かにホルスはまだ未熟。
皆、この事件で解かったであろう、この国の王はセトと決するぞ。」
ラーが呼びかけても、反対の声は上がりません。
心では不満に思う神々も、石になったイシスの前では同じく黙っているより仕方がありません。
肝心のホルスはこの場に居ないのです。
もう、誰にも文句は言えませんでした。
「イシスは今しばらくそのままにしておくが良い。
トートよ、余計な事をするでないぞ。この石の像が、真実、後悔の涙を流したならば、その罪を許し、元に戻してやるが良い。」
後でこっそり元に戻してやろうと思っていたトートは、ラーにその心を見抜かれていたのです。
神はうやうやしく頭を下げ、目論見を諦めました。

「よいな、神々よ！
もう、誰の文句も聞き飽きた！　我が全てを決する！
この二つ国の王は、ここに居るセトだ！」
大声でラーが呼ばわると、場は静まり返りました。不満はあっても、ラーを畏れる気持ちが、皆、強いのです。
しかし、このラーの声に、それ以上の大声で反対を言う者が現われました。
「ラーよ！　貴方は間違っている！
セトが兄を罰したことは責めぬくせに、ホルスが母を罰したことだ

け、なぜ責めるのだ?！
貴方の心を暴いてやろう、もう、この争いに嫌気が差したのだ、だから、どちらでも良いから早く決着を着けたいだけなのだ！　そうだろう！?」
それは、大いなる神々の後ろ・・・位の低い神々が控える、さらに後ろの方からの声でした。
神々を掻き分けて、前へ進み出た神は、あのババイでした。
ラーは憤怒のあまり、口も利けません。
「なんという無礼な事を・・・！　許さぬぞ、ババイ！」
憤慨したのはラーだけではありません。
ババイに情けをかけ、今まで手元に置き育ててきたセトにとっても、驚きの場面でした。
「私は、間違ったことを間違っていると言ったまで！
これは王位がどちらにあるかであって、互いの善悪を比べることなどではない！」
セトが手を下すより遥かに早く、ラーの怒りが爆発し、ババイを地底の国へと押し流してしまいました。
ババイは夜の門を抜けた先、正義の女神マアトの居ます裁きの間というところにまで押しやられてしまいました。
ここには、ババイやホルスの父であるオシリスも控えています。
オシリスは驚き、突然生を絶たれたこの息子を不憫に思い、また、地上の混乱を憂えたのでした。
ババイはその場に今も居ます。
オシリスの国へは入らずに、オシリスの物である全ての食物は受け取らずに、死者の臓物だけを食らって生きているのです。不実な父、オシリスの目の前で。
地上はオシリスが憂えた通りに混乱していました。
ババイの言葉に衝撃を受けたラーは、神々の前から姿を隠してしまったのです。

ホルスもなく、イシスは石像のまま、ついにはラーまでもが隠れて見えなくなったのです。
目に見えた混乱はありませんでした。セトが目を光らせているからです。
この聡い王は、混乱の隙に乗じて、戦に備えて自分の仲間を多く作っておきました。
もう、ラーもアテには出来ません。戦は避けられないと見たのです。
混乱の中、ラーの天蓋を抜けて出た神もいました。
ラーの娘の一人、ハトホルです。牛の目を持つ、愛情と欲望の女神でした。
彼女は、以前にホルスを見掛けて以来、その若く凛々しい姿に夢中なのです。セトによって目を抉られ、苦しんでいるだろうホルスを思うと、いてもたっても居られなかったのでした。

??　ラーの娘

ハトホルは、セトが通った道を、点々と滴る血の跡を追ってホルスの元へと辿り付きました。
女神が見たのは、凛々しい若者のホルスではありませんでした。
絶望と哀しみに暮れる、弱々しい子供の姿なのでした。
この子の母は、今、遠く離れた場所で石になって動けません。
ハトホルは魔法でガゼルを呼び、その乳を絞ってホルスに与えました。
そして、自身の魔力を含んだ女神の乳を、ホルスの両目に滴らせたのです。
もし、ラーの呪いが掛かっていなければ、これでホルスの両の目は、元通りに見えるようになるはずです。
閉じられたホルスの目が、うっすらと開きました。
ハトホルの特別な魔法を受けて、ホルスは光を取り戻したのでした。
ハトホルに導かれ、ホルスは神々の居わすラーの天幕へと向かいました。
「我が愛しいホルスよ、どうかここで待っていて。
今、ラーはひどく御機嫌が悪いのです。何を言っても聞いては下さらないでしょう。
私がこれから、ラーの御機嫌を軽くして参ります、ラーが神々の前に姿を現わされ、天幕が光に包まれたなら、その時こそ、ラーにお目通りを願うのです。」
言い置いて、女神は天幕の中へと入ってゆきました。

ラーは天蓋の奥に引っ込んだまま、考え事をしていました。
やはり、セクメト女神の暴れるままに、この世を打ち壊してしまうのだった、そんな事を考えていたのです。
そのラーの目の前に、可愛い娘のハトホルが、立ちました。

女神は衣装を脱ぎ捨てると、奇妙な品を作った踊りを踊りました。
艶めかしい、その気を誘う淫らな踊りです。
ラーは心がざわめきました。
「私の父、偉大なる神の王ラーよ。
何を塞ぎ込んでいるのです？
全て、罪はナイルに流してしまえば良いのです、償いを済ませた魂はこんなに清らか。
この世はこんなに素敵なところではないですか。」
我が娘の豊かな肉体と蜜のように甘い薫りにくすぐられ、ラーの心は軽やかになりました。
「もうよい、我が娘。可愛い女神のハトホルよ。
さあ、我の傍へおいで。お前の愛しい子供の話しを聞かせておくれ。
その雌牛の瞳を輝やかせるほどの、若く凛々しい恋人との出会いを、まずは話して聞かせておくれ。」
女神の父ラーは、娘のホルスへの想いを知っているのでした。
ハトホル女神は頬を赤く染め、踊りよりもいっそう魅力的に照れながら、逃げ去ったのでした。
外ではホルスがじりじりと待っています。
・・・やがて、ラーの天幕が輝くように明るくなりました。

「ラーよ、そして大いなる神々よ！　ホルスが今、戻りました。」
凛と、響く声が天幕にいた神々を振り返らせます。
そこに立っていたのは、ホルスでした。
「この場に戻ることが許される身とは思いません。
しかし、母イシスの身が心配で、恥を忍んで出て参りました。
ラーよ、その怒りは母ではなく、この私にお向け下さい。
私の首を落とし、その代わりに、母イシスの首は繋いで頂けまいか！？」
ホルスの嘆願に、ラーは驚き、目を見張りました。
この子供が、己の罪を認め、深く悔いている事は、万能の神である

ラーには手に取るほどによく解かっていたのです。セトが、ホルスを引きずってでも連れ帰らなかった理由・・・ラーの前で、勇気を見せられる事を怖れたことも、ラーにはお見通しでした。
セトが怖れた勇気とは、今、この場にいるホルスの、まさにこの言葉だったのです。
「私は石にはなりません。おとなしく、地底の河で怪物に食される時を待ちましょう。
だから、母イシスの僅かな罪は、ラーのお慈悲でお許し下さい！」
「ホルスよ、その両の目はどうした？
セトに抉り出されたはずのお前の目が、どうして元に戻っているのだ？」
ラーは知っていながら、もう一度、ホルスに尋ねました。
「この目はあそこに居るハトホル女神の慈悲によって、治して頂きました。
私は、女神のこの行為に報いるために、生涯の愛を誓ったのです。」
「罪の報いとして両目を奪われたホルスよ、その両目は償いが終わる時まで元には戻らぬはずなのだ。
それが、今、お前は両目を開けて我を見ている。
これはすなわち、お前の罪が許されたる証。・・・そして見よ、イシスの像を。」
イシスの、石になった両目から、るいるいと涙の筋が伝っているのです。
母を庇い、死を乞う我が子の姿に、胸を打たれたためなのでした。
「我はトートに申し述べた。
もし、石となったイシスの像が、真実、罪を悔いる涙を流したならば、その罪を許し元に戻してやるが良い、と。」
ラーの言葉が終わるより早く、トートの秘術によって、石像となったイシスは元の温かい血が通う女神の姿へと戻ったのでした。
「さて、我も少しばかり反省せねばならぬ。あのババイの言う通り、

事を急いておったのだ。
どうだろう、神々よ。皆の意見を聞きたく思う。」
怒りが冷め、落ち付いた声のラーを前に、神々もそれぞれに意見を述べてゆきました。
「まず、オシリスの息子にしてイシスの血を持つホルスは、第一に相続の血が濃い者。血統から見ても、ホルスが王の座につくのが妥当でしょう。」
あくまでもトートはホルスを推しています。
「人間たちは小さき家の主の座を親から子へと引き継ぎます。動物もまた同じ。」
そう言うのは、狩りの神にして見聞の広き神と評判のオヌリスです。
「世界は力で動くのだ、神々の中でもっとも力強き者はこの我だ！王の座が欲しければ、我より強くなるが良い！」
セトが叫びました。
「セトの言う事ももっともだ。・・・我がオシリスに王位を譲り与えたるは、我が老いて衰えたからこそ。
今、王の座はセトのもの。セトの力弱まる前に、これを譲り渡すは道理に当たらぬ。」
ラーはあくまでセトを推します。
「いえ。セトの今、王位にあるは不当のもの。それこそが事の問題なのです、父なるラーよ。」
鋭い一声が放たれました。
夜の神たるトートと、昼の神たるラーの、互いの瞳が合わさりました。
すぐに、見聞広き神オヌリスが二者の間に立ちはだかり、言いました。
「ここは賢者パネブジェドゥウト・・・メンデスの羊の神にも、意見を伺いましょう。
素知らぬ顔をしておられるが、何か胸に言葉は秘められているはず。
我は戦いを厭いはしないが、なにより人間たちが迷惑をする。」

セトとホルスの争いに、昼と夜との因縁の灰がくすぶりかけるのを見たオヌリスの判断でした。
ラーはにっこりと微笑むと、さっそくトートに指を指しました。
「我もそれが良いと思う。多くの言葉を聞き、間違いは避けて通るのだ。」
神々の書記たる神トートは、さっそくパピルスに葦の筆を走らせます。
羊の神の返事はこうでした。
「我の中に秘策はない。ほとほと判別着かぬゆえ、他の神にも聞かれるが良い。
もともと法がないのであるから、判断するは容易でない。」
さあ、この答えには神々も困り果てました。
つまり、こうです。
ホルスが王となる権利も、セトの王位に留まる権利も、元から決められたものではない、と言われてしまったのでした。

さて、賢者パネブジェドゥウトは最後にこう言っておりました。
「もっとも古き神の一人にも意見を聞いてはいかがか？
古く生きておれば、おるほど、その心中には大いなる智慧もあろう。」
こうして、ラーと同じく古い時を過ごした神、古代の狩りの女神ネイトにも使いが走りました。
ネイトは使いの神に鏃の手入れをさせながら、パピルスを取り、葦のペンで手紙を書きました。
「ラーよ。多くの未だ若輩たる神々よ。
もし、オシリスが未だ生ある身であれば、その王冠をいずれ誰に譲り渡すのであろうか？
オシリスの罪がもし、許されたる暁には、いったい誰がその意志を受け取るのだろうか？
セトの王位は仮初のもの、・・・ただ、セトに王位を譲れと言うは

無理がある。
オシリスの罪によりて、もっとも傷を負うたるはこのセトに他ならぬのだから。
それはそれとて、王位はオシリスのもの。次の王を決めたるも、むろんオシリスの意志である。
罰は罪に覆い被さるもの、その子供に及ぶべきではない。」
ラーは頷きながらネイトの手紙を読みました。
「我の元に、今二人の養女とせし女神が居る。
並ぶ者なき美しさのアスタルテとアナトをラーの元へ遣わそう。
ラーの娘の列へ入れ、これをセトに嫁がせれば良い。
我の元に荒れたる大地がいくばくかある。これをセトに贈るが良い。
それでも両者が頷かぬなら、打つ手も尽きたと天を落としてしまわれるが良い。」
用意周到な古代の神の返答に、ラーは笑いが込み上げます。
古代の狩りの女神ネイトは、いつ、話が振って来られるものであるかと手を揉んでいたのです。
こうして、ラーの裁定は決まったのでした。

??　渡し守アンティ

「裁定を申し渡す。
セトよ、王冠を返し赤き大地へと帰るのだ。そして、我の元へ再び戻り、大ホルスと共に、我を助けよ。
ネイトの申し出の通り、我が養女とせし二人の女神をお前に贈ろう。」
ラーの指差す先、天幕の奥からは裸身の女神がするりと姿を現わします。
剣を手に、戦車を駆る戦の女神アスタルテとアナトです。
麗しのアスタルテは、セトを見ると微笑みました。
しかし、セトは顔色を変え、激怒して立ち上がります。
「冗談ではない！女や土地などで誤魔化されはせぬぞ！
・・・ラーよ、貴方までもが我を侮辱するのか？！」
そのセトの言葉には、アスタルテが声を荒くしました。
「心外だ！　その言葉は我とアナトへの侮辱！
私は父となりしラーに説かれて貴方の元へゆく。貴方に会う日を心待ちにしていたのに！
神々の中で、もっとも力強く厳しき神よ、私とアナトは取るに足りぬ女と言われるのか？！」
この言葉に、セトは返すことも出来ず、横を向いてしまいました。
裸身の女神の、なにより、輝くばかりの美しさの前に、セトの誇りと決意もぐらぐらと揺れてはいたのです。
「よいな、セト。それで満足するのだ。
王位はホルスに与えよう。・・・それを、地底のオシリスとて、望んでおるだろう。」
ホルスはうやうやしく頭を下げ、セトはしぶしぶ王冠を外します。
ホルスは迷っておりました。
未熟な自身を、ホルスは既によく見知っておりましたから。

そこで、ラーに懇願したのです。
「おお、全能なるラーよ。その瞳には、未来のことをすら映し出せると聞きました。
私が継ぎし後の世界の姿が、そこに映し出されるのなら、どうか、私にそれをお見せ下さい。」
ラーは解かっておりましたので、快く承知して言いました。
「見るが良い、ホルス。
それで迷いの絶ち切れるものであれば、しっかりと見定めるが良い。」

ホルスがラーに近寄った、その時でした。
どこから来たものか、とても大きな獣が、ラーの天幕の中へ紛れ込んだのです。
居合わせた神々は、セトを見ました。
王座を追われたこの神は、暗い目をして座っています。動くつもりはないのです。
「ホルスがどければ良い。我は知らぬ。」
いくらかの神が獣を追いますが、獣は荒れてますます暴れました。
「あれはなんという獣なの？
名が判らねば魔法も使えはしない、」
イシスの言葉です。
智慧あるトートが首を捻り、答えます。
「あの獣は見たことがない。およそ、名前も無き獣。」
老いた神、ラーの元へ、その獣は走りました。
「危ない！」
ホルスが身体で抑えるのですが、その獣はあまりに大きくて、止まりません。
「どけ、ホルス！
名が無ければ、今付ければ良いのだ！　豚よ、地に倒れ伏すが良い！」

さすがのセトも、ラーに迫る危険には拗ねてもおられず、素早く魔法を放ちました。
ホルスは獣に踏み付けられた左目を手で覆います。
ラーは怒り、腹を見せた大きな豚に向かって叫びました。
「これより先、すべての時間、全ての世において、その名を持つ獣は不浄と定める！」
ラーの、呪いの言葉が倒れ伏した獣に突き刺さります。
山ほどもある大きな豚は、そのままピクリとも動かなくなりました。
ラーの強力な呪いによって、死を賜ったのです。
「月の満ちたる時、その夜にはこの不浄なる者を捧げ、月の魔力によりて、地底の死を清めるものとする。」
ラーは、さらに続けて言いました。
こうして、満月の夜には豚を生贄として捧げる事となったのです。

ホルスの傷付いた左目は、トートが魔法で癒します。体内より湧き出す魔法を唾液に練り、自らの嘴でホルスの左目に注ぎました。
まもなく、ホルスの左目には月の魔力が満ちました。
「ありがとう、我が伯父セトよ。
ラーが今、無事にあるは、貴方のお蔭だ。」
けれどもセトは答える事もなく、一人、ラーの天幕を辞したのでした。
ホルスは地上の王となりました。けれども、荒れたる大地の国と民は、変わらずセトに従うのでした。
地上の王は二人となりました。
「我が父たる神ラーよ、どうして二つ国を分けておしまいになったのでしょう？
私の息子・・・オシリスの血は、二つの国を治めるには不充分だとお考えなのですか？」
ホルスの母イシスは訴えます。
「二つ国は、共に揃って一つの国、完全なるラーの国。

二つに分けて良いはずなどありません。」
イシスと共に、智慧者トートも語ります。
「神々に、もう一度使者を送るが良い。
二つに分かれたものは、さらに多くに分かれゆくもの。二つ国は二つでひとつ。
ホルスとセトを呼べ。・・・神々と共に、ナイルの中洲へ連れて来るのだ。」

トートは、イシスに言い置きました。
「・・・このままでは、ホルスは王になれぬかも知れぬ。荒れたる国の民どもは、セトを王とした。
神々の多くも、ホルスの未熟を知っている。」
イシスは答えて言いました。
「ホルスの未熟は今だけの事。我もトートもホルスを支え、神々の多くもオシリスの血を助けるでしょう。
神々の祝福は、我が子ホルスの上にある。」
力弱き子供、成長する神ホルスは、神々に愛される者なのです。
「イシスよ、セトの口から約束を取るのだ。
力弱き子を護り、助ける事を誓わせる事で、ホルスに二つの王冠が授けられるであろう。
強き神セトが守護するならば、ホルスの王座は不動となろう。」
トートの言葉を守り、イシスはその場で人間に化けました。
セトを欺くことは難しく、トートの智慧に頼るしかないと思ったのです。
神々の集まるナイルの中洲へと、人間に化けたイシスは近付きました。
ナイルの渡し守はアンティという名の、欲張りな神でした。
この神は、怪しい者を、決して中洲へ渡してはならぬと言いつけられておりましたので、注意して目を光らせていたのです。
イシスは貧しい老婆に姿を変えて、アンティの欲の皮を剥ぎ取りま

した。
「ここを渡してもらえないかね？　なに、中洲へ渡って、向こう岸を眺めるだけさ。
葦の刈り取りをしているはずの、私の息子を捜したいのだよ。」
刈り取りをしている息子の姿を見付けたら、すぐにそこへ行ってしまうのだから、と、イシスの化けた老婆は言いました。
アンティはこの老婆を疑っているのです。
「心配なら、あんたも一緒に居て、一緒に探してくれればいいよ。」
それなら、と、渡し守は、渡し賃にパンとワインを欲しがりました。
「このパンとワインは勘弁しておくれ、かわいい息子が腹を空かせて待っているのだよ。」
胸に抱えて放さぬ籠を、アンティは奪おうとして手を伸ばします。
「・・・では、これで勘弁しておくれ。金の指輪はさっき、ひろった物なのさ。」
ぽん、と出された黄金に、アンティは目が眩み、疑いも吹き飛んでしまったのでした。
大喜びで、怪しい老婆を中洲へと渡したアンティは、振り返って驚きました。
老婆と船が、消えてしまったのでした。

??　中州の乙女

イシスは次に、ネズミに化けました。
セトの姿を捜すためでした。
そうして、セトを見付けると、今度は若い女の姿に化けて、さめざめと泣いておりました。
女を見付けたセトは、不審に思います。
人間が居るはずのない中洲なのです。
これはよもや、イシスが化けているのではないか、と、セトは疑いながら、女に近付きます。
「こんなところで何をしておるのだ？　なぜ泣いている？」
セトはわざわざ甘い声で囁き、その正体を暴こうとします。
「おお、そのお姿は神のもの。どうかこの場に逃げ込んだ罪をお許し下さい。
人間が渡ってはならぬ島とは知らず、迷い込んでしまったのです。
けれど、今、泣きましたは戻れぬせいだけでは御座いません。」
女は指で、川辺に寄せた葦の船を差しました。
「夫を無くしてから先、誰にも頼れぬままに息子を育ててまいりましたが、かわいいその息子が、今、窮地に陥っているのです。」
セトの心からは疑いが消えておりました。葦の船まで見せられては、女の言う事が本当のように思えたのです。
「神の御加護もなく、息子は一人、苦労を背負っております。
誰ぞ力ある神の御助力を賜れば、この苦労を軽くもしてやれるのです。」
話を聞くうちに、セトの気持ちも動き始めました。
「なぜそのような事になったのか、訳を聞かせよ。
話によっては、我がそなたらを救ってやろうぞ。」
イシスは、語る言葉に熱が篭もり始めるのを、どうにも出来なくな

りました。
「・・・私の夫のものであった土地は、今はその男のものとなってしまいました。
誰一人、それを私どもに返すことを命じては下さらないのです。
幼い息子には、その土地を守るだけの力がないためなのです。」
「難しい・・・。この問題は、ただお前達に土地を返してやれば良いだけでは済まぬ。
その土地には、土地を耕し暮しおる、いくばくかの民が居る。
民どもにすれば、上となる者が子供では心許ないであろう。」
「やはり、神ですら、私ども親子を助けてやろうとは仰って下さらない・・・。」
女はまた、さめざめと泣き伏したのでした。
セトは慌てて言葉をつなぎます。
「いくら子供が幼いとは言え、やがては成長し、立派な男として地に立とう。
今は預け置くその土地も、いずれはその子に返さねばならぬ。」
「そうでしょうか?!」
女に化けたイシスは強く尋ねます。
「無論だ。
・・・我が父たるラーの名に賭けて、お前が正しいと言い置こう。
その子が未だ、力弱き子であるうちは、我が力及ぶ限りは護り置こう。」
「父たるラーの、名に賭けて?」
イシスは再び、尋ねました。
「間違いなく。」
セトが答えたその時に、イシスもまた、その正体を曝したのでした。
「その言葉、確かにこの耳で聞きました!
貴方はホルスを護ると約束した!
あの子のものであるオシリスの大地を、あの子に返すと、ラーの御名の前に誓ったのです!」

イシスはハトとなり、天空に飛び立つと、大きな声で神々に向かって叫んだのでした。

騙されたセトは、怒りのあまり口も利けません。
そして、ラーに訴えたのでした。
「このような卑怯な手段があろうか？！
我が助けると言ったのは、ホルスではない！　人間の、力無き子供の持つ土地だ！」
しかし、父たるラーは首を振ります。
「力無き子は、すなわちホルスに違いない。
ホルスの及ばぬ分、お前は敵よりこの地を護ると宣言したのだ。
いずれ、この地の全てをホルスのものとする、よいな。」
今すぐ、ホルスに国を譲らねばならないわけではありません。
しかし、ただ預かっているだけでは王とは言えないのです。
けれど土地を奪われるわけでもなく、セトは矛を収めるより仕方がないのでした。
この鮮やかな策は、姉イシスのものではない。セトはトートを睨みました。
そうして、欲張りな渡し守アンティを捕まえると、腹いせにその足のかかとの皮を剥ぎとって、河の鰐どもにやってしまいました。
アンティは、あまりの痛さに涙を浮かべ、もう二度と欲をかいて金など受け取りはしない、と堅く誓ったのでした。

セトは腹を立てたまま、荒れたる大地、セトの国へと帰ってゆきました。
イシスの言い付けを守り、神々より遅れて中洲へ現われたホルスは、ラーの言葉に驚きました。
「この後は、セトがお前の後見となろう。セトの口から出た言葉。
間違いはない。
そして、お前がセトを遥かに凌いだ時には、真実、二つ国の冠を授

けるであろう。」
何もかもが巧く行った・・・イシスとトートは思いました。
しかし、ホルスは重い息を吐き、太祖ラーに告げました。
「ラーよ、我が伯父セトを天空へと連れてゆかれるのですか？」
「玉座より降りたる時には太陽の船へ戻れと、セトには言いおいた。
お前は何か不満があるのか、ホルスよ？」
けれど、その先の言葉は母であるイシスに妨げられて、ラーには届きませんでした。
「おお、ホルスよ！　何を考えているのです？！
強力なる敵セトが、天に帰ってくれるのですよ？
これ以上の、何を望むのです？」
ホルスは首を振って答えます。
「今少し地上に留まり、私の補佐を願いたい。・・・私は、己の未熟を誰よりも知っている。」
セトを太陽の船に追いやって、王座を安泰とすることは、この若き王の頭にはなかったのです。
イシスは懇願して言いました。
「おお、ホルス。
それはいかな万能の神であっても、叶わぬ望み。
お前は未だ、セトを知らぬ。
あのセトが、よもやお前に力を貸すことなどないのです。」
「母なるイシス、我を産み出せし神よ。
不完全なるオシリスの分身たる我を、その身に宿したように、まこと叶わぬ願いなどないのです。
・・・私は、今、ひとたび心を砕き、我が伯父セトに乞うてみるつもりです。」
ホルスの決意は固く、イシスにも止める事は出来ないのでした。
ホルスはただ一人、セトの天幕へと現われました。
「何用か？　新しき王よ。

今さら貴様と話す事など何もありはしないが。」
敵意を剥き出しに、セトはホルスを迎えました。
「ラーの名に賭けて、嘘偽りなき声を聞き置きたい。
本当に、この私を助けると申し出て下さったのか？　父の王座を、
手放すと・・・。」
騙されたとは、口が裂けても言いたくはないセトなのです。
ですから、ホルスへの返答はなく、ただひとつ、頷いたのでした。
「王位はいずれ、お前のもの。これはラーの定めた法に依る。
それさえ知れば、満足であろう？　我は出立前で忙しい、さっさと
退くが良い！」
このセトも、イシスとトートの前に破れ去った事を、ついに認めて
いたのです。
「どうか！
どうか、今しばらく時間を頂けまいか？！　私の傍で、この未熟な
る王を助けて欲しい！
その力とその智慧を、我に預けおいてはくれまいか？！」
ホルスの願いは、けれどセトには届きませんでした。
セトは激怒して言い放ちます。
「戯事を！　どこまで我を愚弄すれば気が済むのか？！
我は砂漠の赤き神、侮りし者、心弱き者に容赦はせぬ！
己を認めし弱き王ホルスよ、我とお前は相容れぬ！」
「我が伯父セトよ、我の声を聞き届けよ！
我は奢らぬ者ホルス！
一人では立てぬことを知っている！
我が母を助け、ラーを助け、神々を、人々を、・・・そして我が伯
父セト、貴方を助け、また、我を支えてもらいたい！　我が言葉、
我が願いは間違いか？！」
必死のホルスは、セトの心を僅かばかり動かしました。
唸るような低い声で、セトは息を吐き出します。
「・・・もう良い、ホルス。道は違えた。

これ以上、我に求めるな。」

??　トト神の誕生

セトの天幕の入口で、二人の神は押し問答を続けます。
セトは一計を思い付きました。このしつこい甥を、引き下がらせる為の策なのです。
「まあ良い、ホルス。こんな所で言いあっていても埒が開かぬ。そろそろ暗くなる。とりあえずは中へ入るが良い。」
粘った甲斐があった、とホルスは喜んで、セトの招きに応じます。
「ささやかだが、宴の用意をさせようぞ。
仇敵同士であれ、もとは一つの家族なのだからな。」
ホルスは、これを好意と受け取って、勧められるままに座しました。
二人の神は、共に飲み、食べ、おおいに語り合ったのでした。
伯父上は、我が父の話を好んでする、ホルスはそう思っておりました。
父と伯父は、本当ならば、今も仲良く共にあったのだ、と、そう思ったのでした。
けれど、セトの本意は別にあり、わざわざ兄オシリスの話をホルスには聞かせていたのでした。
「さて、ホルスよ。
お前には兄が二人居る。もう承知であろうから言うが、妾腹の子ババイと、我が妻の産みし子のアヌビスだ。
どうしたわけか、ババイは我に似たためにラーの怒りを買ってしまったが、お前とアヌビスは聡くあれよ。
ここにある、この葦のように。
切っては筆となり曲げては船となる、この細い草が、曲がらぬものでは役には立たぬ。」
セトはホルスに最後の忠告をしました。我は曲がらぬ葦なのだ、と。
「少し話が過ぎたようだ。
もう休もう、こっちへおいで、ホルス。」

そして、セトの手招きに応じたホルスは見たのでした。
ひとつきりの部屋、ひとつきりの寝床、ひとつきりの明り。
赤き神セトの出す難問が、そこには待ち構えておりました。

「我が元を辞することを咎めはせぬ。
我が意、その心に二重の策はないと言いおこう。
我が甥ホルスの答えをもって、我の真の心を明かすであろう。」
ホルスは長い間、迷いに縛られたのでした。
この伯父のこと、答えを間違えば、恐ろしい罠へと落とされるでしょう。
けれど、ホルスの決意は固いままでした。
「私は、貴方を信じよう。」
セトが、悲しく笑いました。

何事もなく、夜は明け、ホルスは天幕を辞しました。
「お前はどこまでも、我が兄に似る、」
セトの残した言葉が気掛かりなのでした。
よもや、間違いであったのか、ホルスは急いで母の元へと戻りました。
何も知らないホルスとイシスの親子が、セトの企みを知ったのは、それからまもなくの事でした。
智慧あるトートに知らされたのです。
セトが、ラーに申し出たのは、このような言葉です。
「太祖ラーよ、聞き給え。
我はホルスと一夜を明かした。その夜のうちに、何が起きてもおかしくはない場であった。
ひとつの部屋とひとつの明り、ひとつの寝床で起こる事を、我が甥ホルスは承知の上で我と共に過ごしたのだ。」
セトの言葉が真実ならば、これは大変な事なのでした。
「では、ホルスが貴方を受け入れた、その確かなる証拠は？」

トートは、言葉巧みなセトには騙されません。
「魔法を用いて貴方の精を、呼び出して見せては貰えまいか？」
セトは嘲り、言いました。
「我の身に胤が無いことなど、とうに承知ではなかったか？
我が妻が罪を犯したるはそのせいと、言い放ったはそちらであろう？」
セトとトートの言葉の槍は、互いに鋭さを増して敵に刺さります。
イシスは思い留まり、天幕には入らずに、ホルスを下げて退き返します。
神々の誰も、これには気付きませんでした。
ただ一人、万能なるラーを除きおいて他には。

「ああ、どうしたら良いのでしょう。
ホルスよ、お前は罠に落ちた。
私は言いおいたはずです、セトを味方に付けることなど叶わぬ事と。
我が弟セトは、いまだにオシリスを許さないのです。」
セトが受けたと同じ苦痛に、ホルスは心を苛まれました。
「信じたことが間違いであったと・・・、貴方はそう言いたいのですか？　伯父上。」
打ちひしがれたホルスの肩を、優しき母イシスが包みます。
イシスは息子の精をその手に収め、そしてホルスに言いました。
「情けはむしろ、セトの気を悪くするでしょう。あの子はそういう子なのです。
この母に任せおきなさい、ホルス。
それが貴方にとって、もっとも良き道となる。」
ホルスは、イシスが何か良からぬ事を企んでいる事を知りました。
けれど、傷付けられた弱きホルスにはもう、母を止める勇気もありません。
「我が母よ、どうか、マアトの前に正直でいて下さい。貴女の息子の願いです。」

その言葉の前に、母であるイシスもまた、悲しい笑顔で答えたのでした。

イシスが向かった先は、セトの所有する大地でした。
広い庭園には四季の野菜が色とりどりに育っています。
庭を手入れしている下男にイシスは魔法の言葉を投げました。
「さあ、答えるのです。そして忘れるのです。
セトの食する野菜はどれなのです？　すみやかに答え、すみやかに忘れ去りなさい。」
魔法を掛けられた庭師は、眠りながら答えます。
「セト様は、緑の葉を好まれます、ここではレタスしかお食べになりません・・・。」
続いてイシスは、手に隠し持ったホルスの精を、この庭の緑濃い葉の上に振り撒きました。
「この緑見事な花と葉を見よ、それは全て主のもの。
今宵主たる者は、ここへ戻りこの葉を見るであろう、そしてその葉は誘惑の色を浮かべるであろう。」
念入りに、イシスは野菜に魔法を掛けて、セトの土地から去りました。
そのような事は露ほども知らないセトが、この土地へ戻ります。
見えない力に引かれて来たのだとは、思いもよらないセトなのです。
セトはレタスと目が合いました。
なんと良い香りの葉と花でしょう。早速、セトはレタスをちぎり、
そのまま口へ運んでしまったのでした。

次にイシスはラーに願い出たのでした。
「裁定をお願い致します！
我が子ホルスの良からぬ噂を振り掃って頂きたいのです！」
すぐにその場へ、ホルスとセトが呼ばれました。
「今更何を言っても無駄だと思うが、聞くだけは聞いておこう、我

が姉よ。」
「いいえ。貴方が何を言っても無駄になるのですよ、セト。」
いきなりイシスは魔法を呼び起こしました。
「ホルスを救うホルスの力、聡き神の中より現われ出でよ！
我はイシス、ラーの叡智と共にある。この豊穣の魔力に依りて、汝の生誕を望む。
月と太陽、ホルスの両の目と同じ、汝は二つの時を操る者。」
大きな魔力が動いたのでした。
神が産まれ出る時には、これほどの力がいるのです。
さすがのイシスも精根を使い果たし、その場にふらふらとよろめきます。
イシスの身をトートが支えた、その時でした。
突然、セトは呻いて額を両手で押さえたのでした。
強い光がセトの額に昇り、ラーの天蓋を明るくします。
太陽円盤が暗黒の神の頭上に上り、その元に、翼を広げたのは、新しき智慧の神トトでした。

??　神々の戦争

さて、８０年という長い間、二人の王が二つ国を治めました。
ラーの予言した通り、二つに分かれた国と神は、度々、さらに多くに分かれようとしました。
疲れ果てたホルスは、以前、助力してくださった古代の神ネイトに会いに、サイトという街を尋ねて行きました。
「私は、王の器ではないのです。けれど、母や兄の無念を思うと、これを退くこともまた、出来はしない。
我が父オシリスが生ある身であれば、何もかもが巧く収まっていたものを。」
ネイトは静かに答えます。
「おお、ホルスよ。我が言葉を忘れるなかれ。
王の力をお前は持っている。セトですら敵わぬほどの強き力が、お前の中に眠っているのです。
奢ることなき神、ホルスよ。その意味を、とくと考えるが良い。」
ネイトの元を辞して、ホルスは考えました。

ラーは悩んでおりました。
そうして、地底のオシリスに使いを出したのでした。
「オシリスよ、死してなお、地上に深く影なす者よ。
この問題はこじれ過ぎた。そちの望みをもって、決着としたい。」
しかし、オシリスからの返事は、ラーの期待を裏切るものでした。
「おお、万能にして父なる神ラーよ。
私はすでに、地上を去りたる神なのです。
どれほど、千々に心を乱していても、この問題に口を挟む事など出来はしない。
私の罪のために苦しむ弟と、私の死のために苦しむ息子・・・そのどちらを、我が心で選べば良いというのか。

今はただ、理の動くがままに、決着のつく刻を待つのみです。」
ラーは返事をしたためました。
「おお、オシリスよ。思慮深き王よ。
今、地上に緑生い茂るはそなたの望み。ナイルの恵みも、人々の穏やかなるも、みな、そうなのだ。
そなたこそが、死してなお、地上を支える王なのだ。理の動くままに、我はこうして答えを求める。重ねて問う。
この二つ国の真実の王は、ホルスとセトのどちらを置くべきであるか。」
「太祖ラーよ。
貴方にすら判らぬ答えを、なぜ、この私に判ると言うのか。
セトには欠けたる物があり、ホルスには補えぬ力がある。
万物を創造せしめたる者よ、真実の王は貴方である。」
オシリスの答えを読んだラーは低く唸り、考え込んでしまいました。
地上に降りて、最初の王となったのは、誰あろうラー自身なのです。
「正義の女神マアトが、我と共に地底にある事をお考え下さい。
遠い日に、災いを生むと予見された我等五人の兄弟が、ラーに代って王位を継いだ事こそが、そもそもの間違いなのです。理を乱せし我等五人、その罪のままに心乱れ、苦しんでいるのです。」
この手紙は、決して誰の目にも触れさせてはならない、ラーはパピルスの束を小さく丸めて灰にしました。
そうして、その小さな炎と同じように、ラーの心は揺れ動いたのでした。

ついに、理のままに終末はやってきました。
二つ国の荒れたる地、ウアジェトの守護するナイルの上流。
そのセトの国が、ホルスの治めるデルタの国と、ついに衝突したのです。
人も神も、全ての生き物を巻き込んで、大きな戦争となりました。
闘いを禁じた、ラーの言葉は踏みにじられたのです。

ラーはただちに、ホルスと共に戦の船に乗り、セトの軍を迎え撃ちました。
老いて力の衰えたラーを、セトはみくびったのでしょうか。
「ラーは、老いたとは言え、太祖の神。
勝機があるとは思えぬが、起きてしまった事をとやかく言っても仕方がないわ。」
無念の呟きを残して、セトもまた出陣しました。
止める事の出来ない流れのようなものが、二つ国を翻弄したのです。
ラーは言い放ちました。
「我が力、太陽の光と熱よ、来たりて共に集え、ホルスの元へ！
我と我が名がホルスに命ずる、この力持ちて敵を葬らんことを！！」
たちまちホルスは変化して、大きな翼を広げた太陽円盤へと姿を変えたのでした。
ラーの戦艦の舳先に立ったホルスは叫びます。
「この姿を見よ！　そして畏れよ！
我は太祖の力、具現せし神！　父たる者に刃向けし者よ、その罪の深さを知るが良い！！」
輝く光に目を射貫かれ、セトの軍は大混乱に陥りました。
「この翼与えし神、正義の女神マアトの言葉に耳を塞ぎし者どもよ、その心と同じ、深き闇へと落ちるが良い！」
とたんに、セトの軍の者は誰も、他の者の話す言葉を理解出来なくなりました。
疑いと、駆け引きと嘘が、彼等の中に満ちました。
女神アスタルテは、天を突くほどの大きさになり、その者達を掬い上げ、世界中にばら撒きました。
戦の女神アスタルテではありますが、この女神は、まだセトに心惹かれておりましたので、この戦いには進んで参加しないのです。
古代の狩りの女神ネイトと、セトの妻ネフティスも、同じ理由で動こうとはしないのでした。
セトの軍はデルタから出ようとするホルスの軍を、片端からナイル

に沈めてゆきました。
ホルスがデルタを出ようとすると、広大なデルタの豊かな牧場を襲うので、ホルスは身動きが出来ません。
長い闘いとなりました。

北で四度、南で四度、大きな戦いが繰り返されましたが、勝負は着きません。
その間にも、多くのラーの血に連なる神が死んでゆきました。
思い悩んだラーは、一人、戦線を離れ、自身を生み出した太古の水ヌンの元へとやってきました。
その昔、ラーが地上に降り、老いさらばえてしまう前の、輝くばかりの姿であった時以来、ラーはここへは近寄らなかったのです。
ヌンは静まり返ってそこにありました。
つと、その水面に波が揺れ、幾重にも広がってゆきます。
ラーは不思議な光景に、惹かれるようにヌンの前へと立ちました。
そこには若き神が映し出されておりました。
冠を戴くテーベの神アメンです。その真実の名は誰にも知ることは叶いません。
隠されたる者、という意味を持つためです。
秘したる名前を持つ神が、ラーを指して呼びかけます。
「鏡に映りし者、我と汝は同じ者」
ラーは全てを悟りました。
この神の名が秘されたものであることも、ヌンの水面に我が影のように映ることも。
そして今、まさしく戦さのために多くの、自身の生み出せし神が死んでゆく事も。
全てが絶対たる理の元に、ただ一つの道筋であった事を・・・。
そこに立っているのは年老いた古い神でもなければ、テーベの知られざる神でもありません。
再び、光り輝ける者が誕生したのです。

こうして、二つの神は習合し、新たな太陽、アメン・ラーとなりました。
・・・もう誰も、この太陽を妨げる事は出来ません。かのイシスですら、その名を語ることなど出来ないのです。
新しい太陽神は、輝く鷲鳥の姿になると、大空へと飛び立ちました。

ホルスの陣の、デルタの端にあるタニスという街が、セトの支配の街でした。
表面には無抵抗を装って、時が来るのを待っていることは明らかでした。
ホルスは大きな火種を抱えたままで、セトに対しなくてはなりませんでした。
あちこちで、大きな戦いが繰り返されました。
四日の間、ホルスはセトの姿を捜し、五日目の昼、デルタで奇襲に遇いました。
密かに精鋭をデルタの奥深く、ホルスの陣の近くにまで、セトは近付けていたのです。
気付かれぬように、細かく分けて沼に棲む動物に化けさせて、敵を欺いて待ちました。
全ての準備が整うまでに、四日が必要だったのです。
一斉に攻撃してきた敵に対して、ホルスは矢を射掛けさせました。
プタハが授けた、神々の土である鉄で出来ている矢なのです。
これには、さすがのセトもひとたまりもありませんでした。
「今こそ我は気付いたぞ！
ホルスの力は、神々を統べる力！　全て、地上と地底に住まう神は、この子供に味方する！」
はるか天空より、ラーが叫びました。
「敵となりし神々よ、聞け！　砂漠を統べる者、セトよ、聞くのだ！
万物は統べて、ホルスに味方する！　偽りを捨て去るが良い！
我が言葉を疑うならば、自身の力持ちて試すが良い！　我が前に、

姿を見せよ、セト！！」
しばらくの間、お互いの軍は、ピクリとも動かなくなりました。
そうして、やがて、ラーの戦艦の前には、敵の大将であるセトが立ったのでした。

??　新しき王新しき血　終章

「我はどこへも逃げはせぬ！」
大音声にセトは答えました。
そうして、大きな獅子に姿を変えて、ホルスに挑んで吼えました。
戦の船から飛び降りるまま、ホルスも獅子へと姿を変えて、二匹の獅子はもつれるように地に降りました。
広いデルタの牧場の中で、縦横無尽に争いは続き、もうもうと土煙を立ち上げました。
湿地から潅木の茂み、沼の葦原、砂漠に至るまで、二人の戦いの場は広がりました。
いくらかすると、獅子の姿は人の姿に変わり、なおも戦いは続けられました。
互いの武器の激しくぶつかる音、鋭い気勢、空気を切り裂く音などが乱れました。
戦いは七日七晩続けられ、八日目の朝、ようやくのことに砂漠は静かになりました。

満身創痍に傷付いた二人の神が、ラーの元へ戻ったのは昼になってからでした。
ラーは厳しく二人に問います。
「どうじゃ、決着は着いたのか？」
二人の神は声もなく、ただ首を左右に振るのみです。
ラーは頷き、言いました。
「ホルスは伯父を殺せはせぬ。セトも心が定まらぬ。
二人の神もようやく判ったであろう。
決着を着ける事の出来る者、それはすなわち、己れ以外の全てを殺し去る者だ。
我が血に連なる神々に問う。

よもやそのような者に、オシリスの王位を与えて良いものであるのか？」
神々はつと、穢れてしまった自身の手を省みたのでした。
「穢れも哀しみも、全てナイルに乗せて遥かに流してしまえば良い。さあ、セトよ、ホルスよ、お前達の答えを聞こう。」
勇気を奮い、ホルスはセトを見据えて言いました。
「伯父、セトよ。この国を離れ、貴方の領土へ戻ってほしい。赤い砂漠がもともとの貴方の土地だ。・・・私も二つ国を諦めよう。もともとの王、偉大なる太陽、ラーにお返しする。」
アメン・ラーとなり、甦った祖である神は、今はもう、よぼよぼに老いさらばえた姿ではありません。
光り輝く強き太陽、そのものなのです。
セトはホルスを見、そして、ラーを仰ぎ見て頷きました。
「ようやく、納得のいく答えを得た。」
けれどもラーは、二人と神々に言いました。
「それが一番正しいだろう。・・・しかし、今の我は強大なる太陽だ。
地上に降りれば全てを焼くほどの力持つ者だ。
そして、自らの影と習合した我は、夕刻には死する身だ。
今さら王位に戻れはしない。」
太陽の船はこの時から、二隻が必要となったのです。
昼間の、生ける太陽ラーを乗せる船と、夜の、死せるラーを静かに運ぶ船の、二隻なのです。

戦いは終わりました。
多くの、ラーの血に属する神が死にました。
それらを思い返すごとに、ラーの心はひどく痛み、一筋の涙となって流れ落ちるのでした。
そして、流れ落ちたラーの涙は、一人の穢れなき人間となりました。
この戦いを知らぬ、心に影のない人間なのです。

「見よ、神々よ。
我の中から新たな人間が生まれ落ちた。
まったく穢れのない者だ。
おお、どうして早くに気が付かなかったものか、我は今こそ決する
であろう。
この者と、この血に連なる者にこそ、二つ国の王冠を授けようぞ。」
ラーの差し上げた両手の上に、二つ国の二つの王冠が風に乗って運
ばれます。
ホルスは先を切って告げました。
「おお、ラーよ。
ならば私はその者を未来永劫、守護せん事を誓いましょう。
影となって寄り添い、共に王座に在り続けましょう。
その者の血が、新しき王となるならば、また、その血をも護りまし
ょう。」
セトが続けて告げました。
「新しき太陽よ。
ならば我は砂漠に在りて、二つ国の敵を防ぎおこう。
新しき王の血が、我の力を頼るならば、敵を欺き撃ち破る智慧を授
けよう。」
ラーは頷き、二人の神に言いました。
「神々を束ねし者よ、ホルスの名は新しき王の玉座に刻まれるであ
ろう。
砂漠を護りし者よ、セトの名は戦の野を縦横に駆けるであろう。」
生まれたばかりの王たる人間、その頭上には輝くラーの御手から、
二つの王冠が授けられたのでした。
「神々よ、よく見るのだ。
この者を見るたび、思い出すのだ。
愚かな戦いと、我が憤りと哀しみを・・・。」
神々は厳かな心で戴冠を見守り、そうして、生まれたばかりの選ば
れた人間の王に祝福を贈りました。

そして、以来。
ファラオとなりし王は、生きてはホルスの化身となり、死して現世を離れる時には偉大なる太陽と共に歩む事を許され、永遠の命と夜明けごとの復活を約束されたのです。

完

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1101u/

オシリス神話群

2011年6月16日16時21分発行